治罪法修正

#71
1303

沿革法 隆寺

帝國博物館藏書之印

鶴田

6303

昭和九年十二月十四日寄贈
鶴田乙丑氏

治罪法

第一編　總則

第一條　公訴ハ犯罪ヲ訴及ヒ刑ヲ適用スルヲ目的トスル者ニシテ法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢察官之ヲ行フ

第二條　私訴ハ犯罪ニ因リ生スル損害ノ賠償及ヒ贓物ノ返還ヲ目的トスル者ニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス

第三條　公訴ハ被害人ノ告訴ヲ待テ起ル者ニ非ス又告訴私訴ノ棄權ニ因テ消滅スル者ニ

非ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラス

第四條　私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラス公訴ニ附帶シテ刑吏裁判所ニ之ヲ為スヿヲ得但法律ニ於テ其裁判所ニ私訴ヲ為スヿヲ許サヽル場合ハ此限ニ在ラス

又私訴ハ別ニ民吏裁判所ニ之ヲ為スヿヲ得

第五條　公訴私訴ノ裁判ハ管轄裁判所ニ於テ現ニ施行スル法律ニ定メタル訴訟手續ニ從ヒ之ヲ為ス可シ

第六條　刑吏裁判所又ハ刑吏裁判所ト民吏裁判所トニ於テ公訴私訴並起ル時ハ公訴ノ裁判ニ先テ私訴ノ裁判ヲ為ス可カラス若シ賠償返還ノ宣告アリタル後刑ノ宣告アリタル時ハ共ニ其効ナカル可シ

第七條　刑事裁判所ニ私訴ヲ為シタル者ハ願下ヲ為シ更ニ民吏裁判所ニ其訴ヲ為スヿヲ得ス

民吏裁判所ニ私訴ヲ為シタル者ハ檢察官ノ起訴アリタル後願下ヲ為シ更ニ刑吏裁判所

二其訴ヲ為スヿヲ得

第八條　被告人免訴無罪又ハ不問ノ宣告ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ要ムルノ妨碍トナルヿナカル可シ

第九條　公訴ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一　被告人ノ死去

二　告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ被害者ノ棄權又ハ私和

三　確定裁判

四　犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止

五　大赦

六　期滿免除

第十條　私訴ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一　被害者ノ棄權又ハ私和

二　確定裁判

三　期滿免除

第十一條　公訴期滿免除ノ期限左ノ如シ

一　違警罪ハ六月

二　輕罪ハ三年

三重罪ハ十年

第十二條　私訴期満免除ノ期限ハ被害者不能カナル時又ハ民吏裁判所ニ其訴ヲ為シタル時ト雖モ公訴期満免除ノ期限ト同一ナリトス

公訴ニ付キ既ニ刑ノ宣告アリタル時ハ民法ニ定メタル期満免除ノ例ニ從フ

第十三條　公訴私訴ノ期満免除ノ期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算ス但繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起算ス

第十四條　期満免除ハ刑事裁判所ニ於テ檢察官若クハ民事原告人ヨリ起訴ノ手續ヲ為シ又豫審若クハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期限ノ經過ヲ中斷ス但未タ發覺セサル正犯從犯及ヒ民事擔當人ニ付テモ亦同シ

期満免除ノ期限ノ經過ヲ中斷シタル時ハ起訴又豫審ハ公判ノ手續ヲ終メタル日ヨリ更ニ其期限ヲ起算ス但前後ノ日數ヲ通算シテ第十一條ニ定メタル期限ノ二倍ヲ超過スヲ可カラス

第十五條　起訴豫審又ハ公判ノ手續其規則ニ背キタルニ因リ無効ニ属スル時ハ期満免除ノ期限ノ経過ヲ中断スルヲ効ナカルヲ可シ但裁判官ハ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無効ニ属スル時ハ此限ニ在ラス

第十六條　被告人、免訴、無罪又ハ不問ノ宣告言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人告發人又ハ民事原告人ノ悪意若クハ重キ過失ニ出テタル時ハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ムルヲ得

被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人告發人又ハ民事原告人ヨリ悪意若クハ重キ過失ニ付キ過實ノ申立ヲ為シタル時ハ亦前項ニ同シ

民事原告人豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上訴ヲ為シ敗訴シタル時ハ被告人其上訴ヨリ生シタル損害ノ償ヲ要ムルヲ得

要償ノ訴ハ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ為スヲ得

第十七條　被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ裁判官検察書記又ハ司法警察官ニ對シ要償

ノ訴ヲ為スコトヲ得ス但是等ノ官吏被告人ニ對シ故意ニ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタル場合ハ此限ニ在ラス

第十八條　此法律ニ於テ期限ヲ計算スルニ時ヲ以テスルヲ者ハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスル者ハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日休暇ニ當ル時ハ期限ニ算入ス可カラス但期満免除ノ期限ハ此限ニ在ラス

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ暦ニ後ヲ

第十九條　此法律ニ定メタル期限ニハ陸路八里ニ一日ヲ猶豫ヲ加フ八里ニ満タサル者ト雖モ三里以上ナル時亦同シ

島地又ハ外国トノ路程ノ猶豫ハ別段法律ヲ以テ之ヲ定ム

第二十條　此法律ニ於テ訴訟ヲ為スニ分キ定メタル期限ヲ経過シタル時ハ特別ノ場合ヲ除クノ外其權ヲ失フ可シ

第二十一條　訴訟関係人ハ裁判所所在ノ地ニ住セサル時ハ假住所ヲ定メ書記局ニ届置ク可シ否ラサル時ハ書類ノ送達ナシト雖モ異

治罪法草案審査局

議ヲ申立ルヿヲ得ス時ハ其権ヲ失フ可シ

第二十二條　此法律ニ於テ訴訟管係人ニ書類ヲ送達スルニ付キ別段ノ規則アラサル時ハ書記其送達書ヲ作リ自ラ之ヲ送達シ又ハ書記局所属ノ使丁ヲシテ之ヲ送達セシム

若シ書類ノ送達ヲ受ク可キ者裁判所ノ管轄地外ニ在ル時ハ其地ノ裁判所ノ書記ニ送達ノ事ヲ嘱托ス可シ

第二十三條　送達書ハ二通ヲ作リ可シ其一通ハ本人ニ渡ス可シ若シ本人ニ渡スヿヲ得サル

時ハ其住所ニ於テ同居ノ親属又ハ雇人ニ渡ス可シ

送達人ハ之ヲ受取リタル者ヲシテ其二通ニ署名捺印セシメ若シ署名捺印スルヿ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

若シ同居ノ親属又ハ雇人ニ書類ヲ渡スヿ能ハス若クハ是等ノ者之ヲ受取ルヿヲ肯セサル時ハ其地ノ戸長ニ渡シ置キ戸長ハ其書類ニ認印シタル上ニテ速ニ本人ニ送達スルノ處分ヲ為ス可シ

送達人ハ書類ヲ受取リタル者ノ氏名場所及ヒ日時ヲ其二通ニ記載スヘシ

本條ノ規則ニ背キタル時ハ書類送達ノ効ナカルヘシ

送達人ハ其一通ヲ書記局ニ還納シ書記局ニ於テハ送達ノ證トシテ之ヲ保存スヘシ

第二十四條　休暇ノ日及ヒ日出前日没後ハ書類ノ送達ヲ為スヘカラス此規則ニ背キタル時ハ其送達ノ効ナカルヘシ但本人承諾シテ其送達ヲ受ケタル時ハ此限ニ在ラス

時ニ必要ノ節ハ此ニ必ス

第二十五條　官吏ノ作ル可キ書類ハ其所属官署ノ印ヲ用ヒ年月日時及ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ毎葉ニ契印スヘシ若シ官署ノ印ヲ用フルヿ能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載スヘシ此規則ニ背キタル時ハ其書類ノ効ナカルヘシ

官吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印スヘシ若シ署名捺印スルヿ能ハサル時ハ官吏ノ面前ニ於テ作リタル場合ヲ除ク外立會人代署シタル上ニテ其事由ヲ記載

ス可シ

第二十六條　官吏其他何人ニ限ラス訴訟ニ關スル書類ノ正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラス若シ挿入削除及ヒ欄外ノ記入アル時ハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スル時ハ之ヲ讀得ヘキ為メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其變更增減ノ効ナカル可シ

第二十七條　此法律ニ於テ定メタル豫審又ハ公判ニ付テノ規則ハ須布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス

須布以前ニ為シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサル時ハ其効アリトス

第二十八條　此法律ハ將來須布ス可キ別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス但其法律ニ抵觸スル規則ハ此限ニ在ラス

從前須布シタル別段ノ法律ニ於テ豫

審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニ付テハ前項ノ例ニアラス

第二十九條　此法律ハ陸海軍ニ関スル法律ヲ以テ處分スヘキ者ニ適用スルヿヲ得ス

第三十條　此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ノ例ニ從フヿヲ推限

第二編　刑事裁判所ノ構成及ヒ管轄

第一章　通則

第三十一條　通常刑事ノ裁判權ハ民事ノ裁判權ト同一ノ裁判所ニ屬ス

第三十二條　裁判所ノ位置及ヒ管轄ノ區劃ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第三十三條　裁判所ニハ檢察官一名又ハ數名ヲ置ク人名又ハ數名ヲ置クヿヲ得

裁判所ヲ檢察官及ヒ其補負ハ前條ノ式ニ從ヒ之ヲ任ス

補負ハ第六十三條ノ式ニ從ヒ之ヲ任ス

第三十四條　刑事ニ付キ檢察官ノ職務左ノ如シ

一　犯罪ヲ搜索ス

二　犯罪ニ付キ取調ノ處分及ヒ法律ノ適用ヲ裁判官ニ請求ス

三　裁判所ノ命令及ヒ宣告渡ノ執行ヲ指揮ス

四　裁判所ニ於テ公益ヲ保護ス

第三十五條　檢察官一名ハ必ス公廷ニ立會フ可シ

第三十六條　裁判所ニハ書記一名又ハ數名ヲ置ク

第三十七條　書記ハ豫審及ヒ公判ニ立會ヒ調書公判始末書其他訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ作ル可シ

又裁判言渡書其他一切ノ書類ヲ保存ス可シ

第三十八條　犯罪ノ種類ニ因リ裁判管轄ヲ定ムルヿ左ノ如シ

一違警罪ハ違警罪裁判所

二輕罪ハ輕罪裁判所

三重罪ハ重罪裁判所

重罪及ヒ輕罪又ハ輕罪及ヒ違警罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタル時ハ附帶ノ犯罪ニ非スト雖モ上等ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス

第三十九條　左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス

一同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シタル時

二數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタル時

三自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニシ又ハ其罪ヲ免カルヽ為メ他ノ罪ヲ犯シタル時

第四十條　同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地ノ

裁判所ヲ以テ豫審及ヒ公判ノ管轄ナリトス

犯罪ノ地分明ナラサル時ハ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十一條　數箇ノ裁判所ノ管轄地内ニ於テ同時ニ又ハ繼續シテ一箇ノ罪ヲ犯シタル時ハ其中ニテ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數罪俱發ノ場合ニ於テモ亦同シ

第四十二條　犯罪ノ地ニ非サル裁判所ノ管轄地内ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ最近ノ管轄裁判所ニ送致ス可シ

令狀ヲ以テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ其令狀ヲ發シタル裁判所ニ送致ス可シ

第四十三條　數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テ被告人ヲ逮捕スルヿ能ハス若又ハ法律上逮捕スルヿヲ許サヽ時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ着手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十四條　從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル心犯數名アル時ハ最初豫審又ハ公判ニ着手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

高等法院及陸海軍裁判所ノ管轄ニ付キ法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ本條ノ例ニ在ラス

第四十五條　前數條ノ場合ニ於テ裁判官轄ヲ定ムルニ訴ナクシテ裁判所各同一ノ事件ニ付キ裁判ヲ為シタル時ハ最初ニ確定シタル裁判ヲ以テ其効アリトス

第四十五條　外國ニ在テ犯シタルト罪モ日本國ノ法律ニ因リ處斷ス可キ者ニシテ内地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタル時ハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

缺席裁判ヲ為ス可キ場合ニ於テハ被告人最終住所ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス其住所分明ナラサル時ハ第五百九十八條以下ノ規則ニ從ヒ裁判所ヲ定ムルノ訴

ヲ為ス可シ

第四十六條　商船内ノ犯罪ニ付テノ管轄及ヒ訴訟手續ハ別段ナル法律ヲ以テ之ヲ定ム

第四十七條　豫審ハ軽罪ノ為豫審シタル代

裁判官ハ其公判ニ干預ス可カラス前ニ豫審又ハ公判ヲ為シタル裁判官ハ哀訴及ヒ缺席裁判宣告ニ對スル故障ヲ除クノ外其上訴ノ裁判ニ干預ス可カラス此規則ニ背キタル時ハ其言渡ノ効ナカル可シ

第四十八條　裁判所ハ訴ヲ受ケタル事件ニ付キ自ラ其管轄ナルヤ否ヲ判決スルノ権アリ

但其判決ニ付キテハ本案ノ事件終審タル可キ場合ト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ檢察官其他訴訟關係人ヨリ上訴スルヿヲ得

第二章　違警罪裁判所

第四十九條　治罪裁判所ハ違警罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ裁判ス

治罪法草案審査局

但法律ニ於テ特ニ其管轄ヲ他ノ裁判所ニ屬スル時ハ此限ニ在ラス

第五十條　違警罪裁判所判事ノ職務ハ治安裁判所判事之ヲ行フ

判事差支アル時ハ判事補其職務ヲ行フ

第五十一條　違警罪裁判所檢察官ノ職務ハ其裁判所所在ノ地ノ警部之ヲ行フ但始審裁判所檢事ノ具申ニ因リ司法卿ヨリ之ヲ命ス

其申ニ依リ内務卿ノ意見ヲ徴セタル上ニテ司法卿ヨリ檢察官ノ職務ヲ行フ可キ者ヲ

治罪法草案審査局

檢察官ノ職務ヲ行フ可キ警部差支アル時ハ其他ノ警部其職務ヲ行フ

第五十二條　違警罪裁判所檢察官ハ毎月未決既決ノ事件表ヲ作リ軽罪裁判所檢事ニ差出ス可シ

其事件表ニハ違警罪裁判所ノ判事認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第五十三條　違警罪裁判所書記ノ職務ハ治安裁判所ノ書記之ヲ行フ

治罪法草案審査局

第三章　軽罪裁判所

第五十四條　始審裁判所ハ軽罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル軽罪ヲ裁判ス但又重罪及ヒ軽罪ノ豫審ヲ行フ又其管轄地内ノ違警罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ対スル控訴ヲ裁判ス

第五十五條　軽罪裁判所判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ始審裁判所判事一名又ハ数名ニ順次

治罪法草案審査局

満一年間之ヲ命ス又満一年間更ニ其職務ヲ継續セシムルヿヲ得

第五十六條　豫審判事ノ職務ハ司法卿ヨリ始審裁判所判事一名又ハ数名ニ満一年間之ヲ命ス

又満一年以上其職務ヲ継續ス可キヿヲ命スルヲ得

第五十七條　判事差支アル時ハ其他ノ判事又ハ判事補其職務ヲ行フ

治罪法草案審査局

判事補ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒ意見ヲ述ル
コトヲ得

第五十八條　輕罪裁判所檢察官ノ職務ハ始審
裁判所檢事又ハ其指名シタル檢事補之ヲ行
フ

第五十九條　輕罪裁判所書記ノ職務ハ始審裁判
所ノ書記之ヲ行フ

第六十條　東京警視本署長及ヒ府縣長官ハ
各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪
ヲ搜索スルニ付キ檢事ト同一ノ權ヲ有ス但
東京府長官ハ此限ニ在ラス

左ニ記載シタル官吏ハ檢事ノ補佐トシテ其
指揮ヲ受ケ第三編ニ定メタル規則ニ從ヒ司
法警察官トシテ犯罪ヲ搜索ス可シ

警視警部
區長郡長
治安判事
警部ノ在ラサル地ノ戸長

第六十一條　司法警察官檢察官又ハ裁判官ハ
他ノ司法警察官檢察官又ハ裁判官ヨリ犯罪

取調ノ為メ其管轄地内ニ於テ證憑其他事實
參考トナル可キ事物ヲ集取ス可キノ囑托ヲ
受クルヿアル可シ

第六十二條　檢事公二月コトニ豫審及ヒ公判ノ
未決既決ノ事件表ヲ作リ控訴裁判所ノ檢事
長ニ差出ス可シ

又違警罪裁判所檢察官ヨリ差出シタル事件
表ヲ同時ニ檢事長ニ差出シ且意見アル時公
之ヲ附記ス可シ

是等ノ事件表ニハ裁判所長認印シ且意見ヲ
附シ時ハ之ヲ附記ス可シ

第四章　控訴裁判所

第六十三條　控訴裁判所ニ刑事局ヲ置キ輕罪
裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判
ス但其裁判ハ判事三名以上ニテ之ヲ為ス可
シ

第六十四條　刑事局判事ノ職務ハ裁判所長ヨ
リ其裁判所ノ判事數名ニ順次滿一年間之ヲ
命ス

又満一年間更ニ其職務ヲ継續セシムル
ヿヲ得

第六十五條　刑事局ノ判事差支アル時ハ裁判所長ヨリ民事局ノ判事ヲシテ其職務ヲ行ハシム

裁判所長ハ何時ニテモ裁判長ト為ル ヿヲ得

第六十六條　刑事局検察官ノ職務ハ其裁判所ノ検事長又ハ其指名シタル検事之ヲ行フ

第六十七條　検事長ハ其裁判所ノ管轄地内ニ於テ軽罪裁判所検事ニ属スル司法警察及ヒ起訴ノ職務ヲ行ヒ又ハ其所属ノ検事ヲシテ之ヲ行ハシムル ヿヲ得

又起訴及ヒ其他ノ職務ニ付キ其管轄地内ノ検察官ニ告達スル ヿアル可シ

検事長其管轄地内ノ検察官及ヒ司法警察官ヲ監督ス

第六十八條　検事長ハ三月ヿトニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作リ司法卿ニ差出ス可シ

又軽罪裁判所検事ヨリ差出シ方及ヒ事件表ヲ

同時ニ司法卿ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ
附記ス可シ
是等ノ事件表ニハ裁判所長認印シ且意見ア
ル時ハ之ヲ附記ス可シ
第六十九條　刑事局書記ノ職務ハ其裁判所ノ書
記之ヲ行フ

第五章　重罪裁判所

第七十條　重罪裁判所ハ其管轄地内ニ於テ
犯シタル重罪ヲ裁判ス但法律ニ於テ特ニ其

管轄ヲ他ノ裁判所ニ属スル時ハ此限ニ在ラ
ス

被告事件重罪ナル時ハ未遂犯罪又ハ法律上ノ
減軽ニ因リ軽罪ノ刑ニ該ル可キ者ト雖モ重
罪裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス
第七十一條　重罪裁判所ハ三箇月ニ一度ヲ
開ク
若シ事件最多ナル時ハ控訴裁判所長及ヒ検
事長ヨリ司法卿ニ具申シ其許可ヲ得タル上
ニテ臨時開廷スルヿヲ得

第七十二條　重罪裁判所ハ控訴裁判所又ハ始審裁判所ニ於テ之ヲ開ク

第七十三條　重罪裁判所ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ為スヘシ

一　裁判所長一名但控訴裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ命ス

二　陪席判事二名但控訴裁判所ニ於テ開ク時ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ命シ又始審裁判所ニ於テ開ク時ハ其裁判所長及ヒ先任ノ判事ヲ以テ之ニ充ツ

三　法律ニ從ヒ抽籤シタル陪審十名

第七十四條　重罪裁判所檢察官ノ職務ハ控訴裁判所檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

始審裁判所ニ於テ開ク時ハ檢事長ヨリ始審裁判所檢事ヲシテ其職務ヲ行ハシムルヿヲ得

第七十五條　重罪裁判所書記ノ職務ハ開廳スヘキ裁判所書記之ヲ行フ裁判所長ヨリ指名シタル書記之ヲ行フ

第七十六條　重罪裁判所ヲ開クヿ可キ裁判所ハ
所長ハ檢察官ノ請求ニ因リ開廳前十五日ヨ
リ五日間廳公廷ニ於テ本會陪審ヲ抽籤ス可
シ本會陪審ヲ抽籤スヿ
抽籤ヲ為スニハ陪審規則ニ從ヒ作リタル一
周年陪審氏名目錄ニ記載シタル番號ヲ函中
ニ入レ又一周年補缺陪審氏銘目錄ニ記載シ
タル番號ヲ他ノ函中ニ入レ可シ
然レ後陪審二十名及ヒ補缺陪審四名ヲ抽籤
ス可シ

第七十七條　重罪裁判所ヲ開ク可キ裁判
所ノ書記ハ抽籤ノ順序ニ從ヒ本會陪審氏名
目錄ヲ作ル可シ
本會陪審氏名目錄ニハ裁判所長檢察官及ヒ
書記即時ニ署名捺印ス可シ
又書記ハ其謄本二通ヲ作リ裁判所長及ヒ檢
察官ト共ニ署名捺印シ速ニ重罪裁判所長及
ヒ其檢察官ニ送致ス可シ

第七十八條　書記ハ抽籤ニ當リタル陪審ヲシ
テ其開廳ノ日時及ヒ場所ニ出頭セシムル為

メ檢察官ノ名ヲ以テ速ニ其住所ニ徵集狀ヲ
送達ス可シ

第二十五條 第二十八條ニ於テノ規則ハ徵
集狀ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第七十九條 控訴裁判所檢事長ハ聞廳ノ後既
決事件表ヲ作リ司法卿ニ差出ス可シ
其事件表ニハ控訴裁判所長認印シ且意見ア
ル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六章 大審院

第八十條 大審院ニ刑事局ヲ置キ左ノ條件ヲ
判決ス

一 上告編第一章ニ定メタル上告

二 再審ノ訴 第二章ニ定メタル再審ノ訴

三 裁判管轄ヲ定 裁判管轄ノ定

訴

四 公安又ハ嫌疑ヲ為メ裁判管轄ヲ移ス
ノ訴 裁判管轄ヲ移スノ訴

第八十一條 刑事局ニ於テハ判事五名以上ニ
非サレハ裁判ヲ為ス可カラス

第八十二條 刑事局判事ノ職務ハ司法卿ノ奏

法學部研究室

請ニ因リ上裁ヲ以テ其院判事ニ之ヲ命ス

判事差支アル時ハ民事局ノ判事授任ノ順序ニ従ヒ其職務ヲ行フ

第八十三條　刑事局検察官ノ職務ハ其院検事長之ヲ行ヒ又其指名シタル検事之ヲ行フ

第八十四條　刑事局書記ノ職務ハ其院ノ書記之ヲ行フ

第八十五條　検事長ハ三月ヨリ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作リ司法卿ニ差出ス可シ

其事件表ニハ院長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第七章　高等法院

第八十六條　高等法院ニ於テハ刑法第二編第一章第二章ニ記載シタル重罪ヲ裁判ス

又皇族ノ犯シタル重罪及ヒ禁錮ノ刑ニ該ル可キ軽罪ヲ裁判ス

又勅任官ノ犯シタル重罪ヲ裁判ス

前二項ニ記載シタル者ノ正犯及ヒ従犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス其院ニ於テ之ヲ裁判ス

第八十七條　高等法院ハ司法卿ノ奏請ニ依リ上裁ヲ以テ之ヲ開ク但其裁判ス可キ事件及

ヒ開院ス可キ場所モ亦上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第八十八條　高等法院ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ為ス可シ

一　裁判長一名陪席裁判官若干名但元老院議官及ヒ大審院判事中ヨリ毎年豫メ上裁ヲ以テ之ヲ命ス

二　豫備裁判官判事二名但前項ノ式ニ從ヒ之ヲ命ス

三　特別陪審十名

第八十九條　豫審判事ノ職務ハ上裁ニ依リ以テ命ス

之ヲ命ス

第九十條　高等法院檢察官ノ職務ハ大審院檢事長又ハ司法卿ヨリ指名シタル檢事之ヲ行フ

第九十一條　高等法院書記ノ職務ハ大審院ノ書記之ヲ行フ

第九十二條　高等法院ノ裁判ニ對シテハ上訴ヲ許サス但左ノ條件ニ於テハ其院ニ上訴ス

第九十三條　高等法院ノ裁判宣告ニ付テハ左

一 缺席ノ裁判アリタル場合ニ於テ故障

二 第五百七十三條ト同一ノ場合ニ於テ哀訴

三 第五百八十六條ト同一ノ場合ニ於テ再

審ノ訴

第九十三條 被告事件夥多アル時又ハ再審ノ訴ヲ判決スヘキ時ハ新タニ職員ヲ命スルコトアルヘシ

第九十四條 高等法院ノ訴訟手續ハ通常ノ規則ニ從フ

第三編 犯罪ノ捜索起訴及ヒ豫審

第一章 捜索

第九十五條 檢察官ハ後ニ記載シタル告訴告發現行犯又ハ其他ノ原由ニ因リ犯罪アルヿヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタル時ハ其證憑及ヒ犯人ヲ捜索シ第百四十四條以下ノ定メタル規則ニ從ヒ起訴ノ手續ヲ為スヘシ

第一節 告訴及ヒ告發

第九十六條 何人ニ限ラス重罪又ハ軽罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地又ハ被告人

一 缺席ノ裁判アリタル場合ニ於テ故障

二 第五百七十三條ト同一ノ場合ニ於テ哀訴

三 第五百八十六條ト同一ノ場合ニ於テ再審ノ訴

第九十三條 被告事件夥多アル時又ハ再審ノ訴ヲ判決スヘキ時ハ新タニ職員ヲ命スルヿアル可シ

第九十四條 高等法院ノ訴訟手續ハ通常ノ規則ニ從フ

第三編 犯罪ノ搜索起訴及ヒ豫審

第一章 搜索

第九十五條 檢察官ハ後ニ記載シタル告訴告發現行犯又ハ其他ノ原由ニ因リ犯罪アルヿヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタル時ハ其證憑及ヒ犯人ヲ搜索シ第百四十四條以下ノ定メタル規則ニ從ヒ起訴ノ手續ヲ為ス可シ

第一節 告訴及ヒ告發

第九十六條 何人ニ限ラス重罪又ハ輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地又ハ若ク被告人

所在ノ地ノ豫審判事検事又ハ司法警察官ニ
告訴スルヿヲ得
豫審判事告訴ヲ受ケタル時ハ第百五十七條以下
第百三十七條ノ規則ニ従ヒ
其處分ヲ為ス可シ
検事告訴ヲ受ケタル時ハ第百三十二條ノ規
則ニ従ヒ其處分ヲ為ス可シ
司法警察官告訴ヲ受ケタル時ハ速ニ其書類ヲ検
事ニ送致ス可シ
違警罪ノ告訴ハ犯罪ノ地ノ違警罪裁判所
判事検察官又ハ他司法警察官ニ告訴ヲ為スヿヲ
得其告訴ヲ受ケタル司法警察官ハ之ヲ違警罪裁
判所判事検察官ニ移ス可シ
第九十六條 告訴人ハ成ル可ク其証憑及ヒ事
實參考ト為ル可キヿヲ申立ツ可シ
又告訴人ハ第二百十三條以下章第二節ニ定メタル規則ニ
従ヒ當轄裁判所ニ申立テ民事原告人ト為ル
ヿヲ得
第九十七條 告訴人ハ告訴人署名捺印シタル書面ヲ
以テ之ヲ為ス可シ

豫審中発覚シタル衆人モ此ノ手続ニ係ラサレハ別ニ条件ナシ

又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ為スヿヲ得但其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作リ告訴人ニ之ヲ讀聞カセ其上ニテ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルヿ能ハサル時ハ其旨ヲ所記ス可シ

告訴人ニハ告訴ヲ受ケタルノ証書ヲ渡ス可シ

第九十九條 官吏其職務ヲ行フニ因リ重罪軽罪アルヿヲ認知シ又ハ重罪軽罪アリト思料シタル時ハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ検事ニ其告発ス可シ

其告発ハ官吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ為シ成ル可ク証憑及ヒ事實参考ト為ル可キ事物ヲ添フ可シ

違警罪ニ付テハ告発ハ違警罪裁判所ノ検察官ニ之ヲ為ス可シ

第九十九條 何人ニ限ラス重罪軽罪ノ犯罪アルヿヲ認知シ又ハ重罪軽罪ノ犯罪アリト思料シタル時ハ第百九十八條ノ規則ニ従ヒ其所在ノ地又ハ犯罪ノ地ノ豫審判事検事又ハ司法警察官ニ告発

スルヿヲ得

告發ヲ受ケタル官吏ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ為ス可シ

第百一條　告訴告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ為スヿヲ得但第百九十九條ノ場合ハ此限ニ在ラス

不能力者ノ告訴ハ法律ニ定メタル代人之ヲ為スモ其効アリトス

第百二條　告訴告發ハ第百九條ニ從ヒ其願下ヲ為シ又ハ其申立ヲ變更スルヿヲ得此場合ト雖モ第十六條ノ規則ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受クルヿアル可シ

告訴又ハ告發ノ願下ヲ為シ又ハ其申立ヲ變更スルニ付キ理由ヲ付スルト否トハ本人ノ隨意ナリトス

第二節　現行犯罪

第百三條　現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

第百四條　重罪又ハ軽罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

一　犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラ

ル、時

二　兇器賊物其他犯人ト思料ス可キ物件ヲ携帶シタル時

三　家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル為メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル為メ戸主又ハ戸主ト代ル可キ者ヲ

第百四九條　司法警察官及ヒ巡査其職務ヲ行フニ當リ重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ軽罪ノ現行犯アルヿヲ知リタル時ハ令狀又ハ命令ヲ待タスシテ被告人ヲ逮捕ス可シ

違警罪ノ現行犯アルヿヲ知リタル時ハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ之ヲ違警罪裁判所ニ檢察官ニ告發ス可シ其氏名住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ違警罪裁判所ニ引渡スヿヲ得

第百五六條　巡査被告人ヲ逮捕シタル時ハ逮之ヲ司法警察官ニ之ヲ引致ス可シ

其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第百六七條　司法警察官被告人ヲ逮捕シ又ハ之ヲ受取リタル時ハ第二百十四條以下ノ規則ニ從ヒ假ニ被告人ノ訊問及ヒ檢證ヲ處分ヲ為ス可シ

第百七八條　何人ニ限ラス重罪又ハ軽罪ノ現行

犯アル場合ニ於テハ直ニ被告人ヲ逮捕スル
コトヲ得

第百九條　前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シ
タル者之ヲ司法警察官ニ之ヲ引致スヲ可シ若シ
引致スルコトヲ得サル時ハ自己ノ氏名職業住
所及ヒ逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡査ニ引
渡スコトヲ得

被告人ヲ巡査ニ引渡シタル時ハ速ニ告訴又
ハ告發ヲ為スヲ可シ

被告人又ハ巡査ハ逮捕ヲ為シタル者ニ對シ
共ニ官吏ノ面前ニ至ルヲ求ムルヲ得但
逮捕ヲ為シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サ
レハ其求ヲ拒ムコトヲ得ス

第二章　起訴

第一節　檢察官ノ起訴

第百十九條　檢事犯罪ノ捜索ヲ終リタル時ハ左
ノ手續ヲ為スヲ可シ

一　重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審
判事ニ豫審ヲ求ムヲ可シ

二　輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕

治罪法草案審査局

重難易ニ従ヒ豫審ヲ求メ又ハ直ニ軽罪裁判所ニ其訴ヲ為ス可シヲ得

三　違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ証據書類ニ意見書ヲ添ヘ違警罪裁判所検察官ニ之ヲ送致ス可シ

四　被告人ノ身分犯罪ノ種類又ハ場所ニ因リ其管轄ニ属セサルモノト思料シタル事件ニ付テハ管轄裁判所ノ検察官ニ之ヲ送致ス可シ

若シ被告事件罪ト為ラスシテ性質ヲ有セス又ハ公訴受理ス可カラサルモノト思料スル時ハ起訴者ノ手續ヲ為ス可カラス

第百十一條　前條ノ場合ニ於テ被告事件ニ付告訴ニ係ル時ハ検事ヨリ其處分ヲ被告者ニ通知ス可シ

第百十二條　検事豫審ヲ求ムル時ハ証憑及ヒ事實參考トナル可キ事物ヲ送致シ且臨検ス可キ場所逮捕ス可キ人名及ヒ原被ノ証人トナル可キ者ヲ指示ス可シ

第二節　民事原告人ノ起訴

第百十三條　重罪又ハ軽罪ノ被害者公訴ニ附帯シテ私訴ヲ為サントスル時ハ告訴ト共ニ之ヲ申立テ又ハ告訴ヲ為シタル後其旨ヲ被告人ニ通知シ豫審判事ニ之ヲ申立ツ可シ

豫審判事直ニ被害者ヨリ民事原告人ト為ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ検察官ノ起訴ナシト雖モ公訴私訴ヲ従セテ受理シタル者トス看做ス可シ

豫審判事ハ何レノ場合ニ於テモ直ニ被害者ヨリ民事原告人ト為ル可キノ申立ヲ受領タ

治罪法草案審査局

ル時ハ其旨ヲ検事ニ通知ス可シ

第百十三條　民事原告人其管轄裁判所ヲ在ノ地ニ住セサル時ハ其地ニ假住所ヲ定メ民事原告人ト為ル可キノ申立書ニ其旨ヲ記載シ書記局ニ居置ク可シ

検事及ニ被告人ヨリ民事原告人充ノ書類ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ

民事原告人其管轄裁判所ヲ在ノ地ニ住所ヲ定メ其旨ヲ書記局ニ居置カサル時ハ當然送達ヲ得ヘキ書類ヲ受戻ラスト雖モ異議ヲ申

治罪法草案審査局

立ルヿヲ得ス

第百十四條　被害者ハ公訴ノ未ダ審ニ付キ始審ノ判決終
審ノ判決アルマテ何時ニテモ公訴ニ附
帶シ私訴ヲ為シ若クハ其要ムル所ヲ變更ス
ルヿヲ得
又私訴ノ願下ヲ為シタル後更ニ其申立ヲ
為シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヿヲ得
第百十五條　被害者ハ代人ニ委任シテ私訴ヲ
為シ又ハ其願下若クハ棄權ヲ為スヿヲ得若シ
被害者不能力ナル時ハ法律ニ定メタル代人

之ヲ為ス可シ

第三章　豫審

第百十六條　現行ノ重罪又ハ軽罪ヲ除クノ外
豫審判事ハ前章ニ定メタル規則ニ從ヒ檢事
又ハ民事原告人ノ請求アルニ非サレハ豫審
ニ取掛ルヿヲ得ス此規則ニ背キタル時ハ其
請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ効ナカル可シ
第百十七條　豫審判事ハ重罪又ハ軽罪ニ付キ
直ニ告訴又ハ告發ヲ受ケタル時ハ召喚狀ヲ
依テ被告人ヲ呼出シ之ヲ訊問ス

ルヿヲ得若シ引續キ取調ヲ為ス可キ者ト思
料シタル時ハ其事件ヲ檢事ニ送致ス可シ

第百十八條　豫審判事ハ告訴告發ノ事件急速
ヲ要スル時ハ直ニ被告人ニ對シ勾引狀ヲ發シ又
ハ訊問シタル後上ニテ勾留狀ヲ發スルヿヲ得
但場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ檢事ニ通知シ且證憑及ヒ事實參考ト為
ル可キ事物ヲ送致ス可シ
若シ其通知ヲ為シタルヨリ一日内ニ檢事起
訴ヲ為サヽル時ハ速ニ被告人ヲ放免ス可シ
但後日起訴ヲ為スノ妨碍トナルヿナカル可シ

第百十九條　被告人所在ノ地ノ豫審判事直ニ告訴告發
ヲ受ケ又ハ檢事ヨリ其送致ヲ受ケ被告事件急速ヲ要スル時ハ通常
ノ規則ニ從ヒ被告人ノ訊問又ハ檢證處分ヲ為シタル後ニ證憑及ヒ事實參
考ト為ル可キ事物ヲ犯罪ノ地ノ豫審判事ニ送致スル可シヿヲ得若シ禁錮以
上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料スル時ハ拘留狀ヲ以テ被告人ヲ送致スルヿヲ得

第百二十條　檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事
ニ請求シテ訴訟書類ヲ檢閲スルヿヲ得但二
十四時内ニ之ヲ還付ス可シ犯罪ノ地ノ豫審
又必要ナリト處分ニ付臨時其請求ヲ為スヿヲ得

第一節　令狀

第百二十一條　豫審判事ハ檢事又ハ民事原告人

治罪法草案審査局

ノ起訴ニ因リ重罪又ハ軽罪ノ事件ヲ受理シタル時ハ被告人ニ對シ先ツ召喚状ヲ發スヲ可シ但召喚状ノ送達ト被告人出廷トノ間ハ少クモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第百二十二條　豫審判事ハ召喚状ヲ受クヲ可キ被告人其管轄地内ニ住セサル時ハ訊問スヲ可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判

△又被告人管轄地内ニ住スルト否トヲ問ハス其事件重大ナル被告人所在ノ地ノ治安判事ニ訊問之事ヲ囑託

第百二十三條　豫審判事ハ召喚状ニ受ケタル被告人其自時ニ出廷セサル時ハ拘引状ヲ發スルヲ得

第百二十四條　豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ出直ニ勾引状ヲ發スルヲ得

一　被告人定リタル住所アラサル時

二　被告人罪証ヲ湮滅シ又ハ逃亡スルノ恐アル時

三　被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスルノ恐アル時

ノ起訴ニ因リ重罪又ハ軽罪ノ事件ヲ受理シタル時ハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發スル可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出廷トノ間少クモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第百二十二條　豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ住セサル時ハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事ニ其處分ヲ囑托スルヿヲ得

第百二十三條　豫審判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ拘引狀ヲ發スルヿヲ得

第百二十四條　豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ直ニ勾引狀ヲ發スルヿヲ得

一　被告人定リタル住所アラサル時

二　被告人罪証ヲ湮滅シ又ハ逃亡スルノ恐アル時

三　被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスルノ恐アル時

第百二十五條　勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シタル豫審判事ニ被告人ヲ引致ス可シ

勾引狀ヲ依リ勾引シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間ヲ經過スル時ハ勾留狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放ス可シ

第百二十六條　勾引狀ヲ發シタル前被告人既ニ豫審判事ノ管轄地外ニ在ル時ハ被告人ヨリ其所在ノ地ノ豫審判事ニ取調ヲ求ムルヲ

得其求ヲ受ケタル豫審判事ハ假ニ被告人ヲ勾留シ速ニ其上ニ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ速ニ其旨ヲ通知ス可シ

第百二十七條　前條ノ場合ニ於テ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ハ速ニ被告人ヲ拘留シタル豫審判事ニ訊問ノ條件ヲ明示シテ其處分ヲ囑託ス可シ

其囑託ヲ受ケタル豫審判事ハ被告人ヲ訊問シタル後其旨ヲ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ通知シ其意見ヲ聽キタル上ニテ被告人ヲ

放免シ又ハ前ニ發シタル拘引狀ヲ依リ管轄
豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ為ス可シ

第百二十六條　豫審判事ハ召喚狀又ハ勾引狀
ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事由アリ
テ令狀ニ應スル能ハサルヿヲ証明シタル時
ハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルヿヲ得
若シ被告人令狀ヲ發シタル豫審判事ノ管轄
地外ニ在ル時ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事
ニ訊問ノ事ヲ囑托ス可シ

豫審判事ハ被告人管轄地内ニ住スルト否ト

ヲ問ハス其事件重大ナラサル時ハ被告人所
在ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑托スルヿ
ヲ得

第百二十七條　勾留狀ハ被告人逃亡シ又ハ第
百二十四條ノ場合ヲ除クノ外被告人ヲ訊問
シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト
思料スルニ非サレハ之ヲ發スルヿヲ得ス

第百二十八條　豫審判事ハ拘留狀ヲ執行シタ
ルヨリ十日ヲ過クル時ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ
若クハ假ニ勾留ヲ解キ被告人ヲ責付ス可シ

檢事ハ被告人ヲ責付スルヿ無ク更ニ十日間之ヲ拘留ス可キヿヲ豫審判事ニ求ムルヲ得

第百二十九條　収監狀ハ既ニ取拂リタル豫審ノ手續ヲ檢事ニ通知シ且其意見ヲ聽キタル上ニ非サレハ之ヲ發スルヿヲ得ス

第百三十二條　收監狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一　被告事件ノ概畧及ヒ加重減輕ノ模様アル時ハ其概畧

二　其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條

三　檢察官ノ意見ヲ聽キタルヿ

第百三十三條　總テ令狀ニハ被告事件及ヒ事件被告人ノ氏名職業住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除クノ外其氏名分明ナラサル時ハ容貌體格等ヲ明示ス可シ

又令狀ニハ之ヲ發スルノ年月日時ヲ記載シ豫審判事及ヒ書記署名捺印ス可シ

拘引狀拘留狀收監狀ニハ執行ノ為メ必要ナル時ハ巡査ノ助力ヲ求ム可キヿヲ記載ス可シ

第百三十二條　召喚狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ本書記名所屬人使丁ヲシテ被告人又ハ其住所ニ之ヲ送達セシム

第百三十三條　拘引狀拘留狀收監狀ハ巡査ヲシテ之ヲ執行セシム

令狀ハ日本全國ニ於テ之ヲ執行ス

又令狀ハ時機ニ因リ正本數通ヲ作リ巡査數人ニ分付スルヿアル可シ

令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其謄本ヲ下付ス可シ此場合ニ於テハ第二十三條第二項第四項ノ規則ニ從フ

第百三十四條　令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査ハ被告人其家宅又ハ他人ノ家宅ニ潛匿シタリト思料スル時ハ其地ノ戶長又其差支アル時ハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ

巡査ハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ラス搜索調書ヲ作リ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

家宅搜索ハ日出前又ハ日沒後之ヲ爲スヿヲ得ス

第百三十七條　豫審判事ハ被告人他ノ管轄地內ニ潛匿シタルヿヲ知リ又潛匿シタリト思料スル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スル時ハ巡査ニ令狀ヲ帶行セシムヿヲ得

巡査ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事ニ被告人ノ逮捕ヲ求ム可シ

第百三十八條　豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルヿ能ハサル時ハ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送リ搜索及ヒ逮捕ヲ爲スヿヲ請求スルヿヲ得

請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地內ノ檢察官ヲシテ搜索及ヒ逮捕ノ処分ヲ爲サシムヿヲ可シ

第百三十九條　陸海軍在營ノ士官以下ニ卒ニ對シ令狀ヲ發シタル時ハ所屬長官ニ令狀ヲ示ス可シ長官ハ已ムヲ得サル差支アルニ非サレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應セシム可シ其行軍ノ際モ亦同シ

第百四十六條　拘留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監倉ニ之ヲ引致ス可シ若シ其監倉ニ引致スルヿ能ハサル時ハ假ニ最近ノ監倉ニ引致スルヿヲ得何レノ場合ニ於テモ監倉長ハ令狀ヲ檢閲シタル上ニテ被告人ヲ受取リ其證書ヲ渡ス可シ

第百五十七條　令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査ハ之ヲ執行シタルヿ又ハ執行スルヿ能ハサル時ハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載ス可シ然ル後令狀執行ニ關スル書類ヲ書記局ニ差出ス可シ但書記ハ其受取證書ヲ渡ス可シ

第百五十八條　拘留狀又ハ收監狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監倉又ハ獄舍ニ在ル時ハ書記ヨリ之ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正本及ヒ謄本ニ

記載ス可シ

第百四十三九條　第二節ニ定メタル密室監禁ノ場合ヲ除クノ外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏立會ノ上依リ其親屬朋友又ハ代言人ニ接見スルヿヲ得

書翰書籍其他ノ書類ハ豫審判事ノ檢閲ヲ經タル後ニ非サレハ被告人ト外人トノ授受スルヿヲ許サス但豫審判事ハ其書類ヲ留置クヿヲ得

第百四十四條　豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非スト思料シタル時ハ豫審中何時ニテモ拘留狀又ハ收監狀ヲ取消ス可シ但收監狀ヲ取消ス時ハ豫メ檢察官ノ意見ヲ聽ク可シ

第百四十五條　監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與ス可シ

第二節　密室監禁

第百四十六條　豫審判事ハ豫審中事實發見ノ為メ必要ナリト思料スル時ハ檢事ノ請求ニ依リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀又ハ收監狀ヲ受

ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲ為
スヿヲ得
豫審判事ハ其言渡ヲ為シタルヿヲ速ニ檢事
ニ通知スル可シ
第百四十七條　密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被
告人ハ一名ユトニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事
ノ允許アルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書
類貨幣其他ノ物品ヲ授受スルヿヲ禁ス
食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト
雖モ監倉長ノ特ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ

授與セシム
第百四十八條　密室監禁ノ期限ハ十日ヲ超過
ス可カラス但十日ユトニ其言渡ヲ更改スル
ヿヲ得
若シ言渡ヲ更改スル時ハ其理由ヲ裁判所長
ニ申報ス可シ
豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊
問シ通常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ
第三節　証據
第百四十九條　法律ニ於テハ被告事件ノ模様

二因リ有罪タルノ推測ヲ定ムルヿナシ

被告人ノ白狀官吏ノ檢證調書證據物件

議證人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵

憑ハ裁判官ノ判定ニ任ス

法學會藏

第百四十六條 豫審判事ハ檢察官民事原告人

又ハ被告人ノ請求ニ依リ又ハ職權ヲ以テ事

實發見ノ為メ必要ナリトスル證據又ハ徵憑

ヲ集取スヿ可シ

第百四十七條 豫審判事ハ臨檢家宅搜索臨檢物件

差押又ハ被告人證人ノ訊問ヲ為スニハ書記

ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作リ豫審判

事ト共ニ署名捺印スヿ可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ル

能ハサル時ハ立會人二名アルヲ要ス但監倉

法學會藏

ニ就テ被告人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏
一名ヲシテ立會ハシムル可シ
前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作
リ之ヲ朗讀スル上ニテ立會人ト共ニ署名
捺印ス可シ
書記又ハ立會人ナクシテ為シタル處分ハ其効
ナカル可シ

第四節　被告人ノ訊問及ヒ對質

第百四十八條　豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問
ス可シ但檢証ヲ為シ又ハ証人ヲ訊問スルニ
付キ急速ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス
第百四十九條　豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪
ヲ白状シ其他正實ナル申立ヲ為サシムル為
メ恐嚇又ハ詐言ヲ用フ可カラス
第百五十四條　書記ハ訊問及ヒ供述ヲ錄取シ被
告人ニ之ヲ讀聞カス可シ
豫審判事ハ被告人ニ其供述ノ相違ナキヤ否
ヲ問ヒ之ヲ署名捺印セシム可シ若シ
被告人署名捺印スルヲ能ハス又ハ肯セサル
時ハ其旨ヲ附記ス可シ

書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルヿヲ記載シ豫
審判事ト共ニ署名捺印スヘシ

第百五十五條　被告人其供述ニ付キ變更增減
スヘキヿヲ申立テタル時ハ更ニ訊問ヲ為シ又
可キ然ル後其訊問及ヒ供述ヲ録取シ之ヲ讀
聞カセ前條ニ從ヒ署名捺印スヘ可
シ

第百五十六條　被告人ハ供述書ノ謄本ヲ求ム
ルヿヲ得

第百五十七條　豫審判事ハ被告人ノ共犯タル
ヿ人違ナキヿヲ其他事實ヲ發見スヘキヿ一切ノ
模様ヲ証スル為メ必要ナリトスル時ハ被告
人ト他ノ被告人証人又ハ其他ノ者ト對質セ
シムルヿヲ得

第百五十八條　書記ハ對質人ノ供述及ヒ對質
ヨリ生スル一切ノ事件ヲ録取シ對質人ニ其
對質ニ関スル部分ヲ讀聞カスヘシ

第百五十九條　第百五十五條ノ規則ハ對質ニ付
テモ亦之ヲ適用ス

第百五十九條　被告人又ハ對質人聾ナル時ハ書

面ヲ以テ問ヒ啞ナル時ハ書面ヲ以テ答ヘシ
ム若シ聾者啞者文字ヲ知ラサル時ハ通譯人
ヲ命ス可シ
被告人又ハ對質人國語ニ通セサル時亦モ亦前
項ニ同シ
第百五十六條 通譯人ハ正實ニ通譯ス可キノ
宣誓ヲ為ス可シ
通譯人ハ書記調書ヲ朗讀スルノ後之ニ署名
捺印ス可シ
第百九十五條第百九十六條ノ規則ハ通譯人

本條ニ付テモ亦之ヲ適用ス
第五節 檢証及ヒ物件差押
第百五十七條 豫審判事ハ事實發見ノ為メ必
要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所ニ臨檢ス
可シ
又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト
雖ヒ臨檢ス可シ
第百五十八條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日
時場所及ヒ被告人ノ人違ナキヿヲ證明ス可
キ模様ニ付キ調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益トナル可キ模様ヲモ記載ス可シ

第百五十九條　豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ發見シタル物件其出所及ヒ模様ニ因リ被告人ノ人違ナキヿ又ハ犯罪ノ模様ヲ知ルニ足ル可シト思料シタル時ハ之ヲ差押ヘ認印ヲ為シ簡畧ナル目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ逓送スルハ書記之ヲ擔任ス可シ

第百六十條　豫審判事ハ臨檢家宅搜索又ハ物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサル時ハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クヿヲ得

第百六十五條　豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ所持スルノ疑アル者ノ住所ニ臨檢スルヿヲ得

若シ被告人又ハ物件ヲ所持スル者其住所ニ在ラサル時ハ同居ノ親屬若シ其在ラサル時ハ戸長又其差支アル時ハ隣佑二名ノ立會アルヲ要ス

第百三十四條第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百六十六條　被告人ハ臨檢又ハ家宅搜索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルヿヲ得

若シ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會ヲヿヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

接事民事原告人及ヒ其代人ハ豫審判事ニ通知スルヿヲ得但其立會ノ為メ豫審ヲ遲延ス可カラス

第百六十七條　家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第百五十九條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押フ可シ

物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ謄本ヲ立會人ニ渡ス可シ

第百六十八條　豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辨解ヲ為サシム可シ

其訊問及ヒ供述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第百六十九條　豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽クヿヲ必要ナリトスル時ハ

書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問スル可シ

第百六十九條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百六十六條　豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルヿヲ禁スルヿヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルヿヲ得

第百六十七條　豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ依リ臨檢及ヒ家宅搜索ノ事ヲ其地ノ

治安判事ニ委任スルヿヲ得

第百六十八條　豫審判事ハ事實發見ノ為メ必要ナリトスル時ハ驛遞電信鐵道ノ官署ヲ

諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ又ハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類電報又ハ物件ヲ受取リ開披スルヿヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ

前項ノ書類及ヒ物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ還付ス可シ

第六節　證人訊問

第百六十九條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ指名シタル者ヲ證人トシテ之ヲ呼出ス可シ

原告證人被告證人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ最モ事實ヲ知ル可シト思料シタル者輕罪事件ニ付テハ各五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限リ先ツ之ヲ呼出ス可シ但事實發見ノ為メ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

又豫審判事ハ職權ヲ以テ原被ノ指名セサル者ト雖モ證人トシテ之ヲ呼出ス一ヲ得

第百七十四條 證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ但其呼出狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ本人又ハ其住所ニ之ヲ送達スルコトヲ

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ送達ノ事ヲ囑托ス可シ

第百七十五條 豫審判事ハ證人裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑托スル一ヲ得

若シ證人管轄地外ニ住スル時ハ其所在ノ地

ノ豫審判事又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑托
スルヿヲ得
本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑托ヲ受ケタル
判事ノ名ヲ以テ其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ
送達ス可シ
第百七十六條　呼出狀ニハ證人ノ氏名住所及
ヒ職業ヲ記載ス可シ
又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ
罰金ヲ言渡シ且勾引スルヿアル可キ旨ヲ記
載ス可シ

治罪法草案審査局

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間ハ少クトモ二十四
時ノ猶豫アル可シ
第百七十七條　豫審判事ハ證人疾病公務其他
正當ナルヿヲ且重要ナル事故ニ因リ呼出ニ應
スル能ハサルヿヲ證明シタル時ハ其所在ニ
就テ之ヲ訊問ス可シ
第百七十八條　證人トナル可キ者陸海軍在營ノ
下士兵卒ナル時ハ其所屬長官ヲ經由シテ呼
出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出廷セシム可
キヿヲ認可シ又ハ職務上已ムヲ得サル差支

治罪法草案審査局

アル時ハ其理由ヲ付シテ出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第百七十五條　豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除クノ外証人呼出ニ應セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル上ニテ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ付テハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

豫審判事ハ其証人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直ニ勾引狀ヲ發スルヿヲ得但其費用ハ証人之ヲ擔當スル可

若シ証人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發スルヿアル可シ

第百七十六條　豫審判事ハ証人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケサルヿ其呼出狀第百七十六條ノ規則ノ式ニ背キタルヿ又ハ豫知シ難キ正當ノ事故アリテ出廷スル能ハサリシヿヲ証明シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル上ニテ其罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ

第百七十七條　証人呼出狀ニ依リ出廷シタル

時ハ其呼出狀ヲ書記ニ差出シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキヿヲ証明ス可シ

第百七十八條　豫審判事ハ証人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年齢職業住所及ヒ第百八十四條ニ記載シタル者ナルヤ否ヲ問フ可シ

第百七十九條　豫審判事ハ証人ヲシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳述ヲ為ス可キヿヲ宣誓セシム可シ

宣誓書ハ豫審判事之ヲ朗讀シタルヒトテ証人ヲシテ署名捺印セシム若シ署名捺印スル

能ハサル時ハ其旨ヲ記載ス可シ

宣誓書ハ訴訟書類ニ之ヲ添置ク可シ

第百八十四條　左ニ記載シタル者ハ証人タルヿヲ許サス但事實參考ノ為メ其陳述ヲ聽クヿヲ得

一　民事原告人

二　民事原告人及ヒ被告人ノ親屬

三　民事原告人及ヒ被告人ノ後見人及ヒ被告人ノ後見ヲ受クル者

四　民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第百八十一條　左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一　十六歳未満ノ幼者

二　知覺精神ノ不充分ナル者

三　瘖唖者

四　剝奪公權又ハ停止公權ノ者

五　重罪事件ニ付重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ軽罪事件ニ付キ軽罪裁判所ニ訴ヘラレタル者

六　現ニ陳述ヲ為ス可キ事件ニ付キ誓テ訴ヲ受テ其証憑充分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者

第百八十二條　証人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シ上ニテ陳述ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ付テハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

醫師藥商穩婆代言人辨護人代書人公証人若クハ神官僧侶其身分職業ニ関スル秘密ノ事

件ニ付キ委托ヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ在ラス

第百八十七條　証人ハ他ノ証人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問スヘシ但事實發見ノ為メ必要ナリトスル時ハ証人ト他ノ証人又ハ被告人ト對質セシムルヿヲ得

第百八十八條　豫審判事ハ証人ノ陳述ヲ確實ナラシムル為メ必要ナリトスル時ハ重罪軽罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルヿヲ得

若シ証人同行スルヿヲ肯セサル時ハ呼出シ

應セサル者ト看做シ第百七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡スヘシ

第百八十九條　第百五十九條第百六十條ノ規則ハ証人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百八十九條　皇族勅任官証人ヲ訊ル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽クヘシ

第百八十九條　書記ハ証人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作ルヘシ

其調書ニハ証人宣誓ヲ為シタルヿヲ又ハ為サ

件ニ付キ委托ヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ在ラス

第百八十七條　証人ハ他ノ証人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問スヘシ但事實發見ノ為メ必要ナリトスル時ハ証人ト他ノ証人又ハ被告人ト對質セシムルヿヲ得

第百八十八條　豫審判事ハ証人ノ陳述ヲ確實ナラシムル為メ必要ナリトスル時ハ重罪軽罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルヿヲ得若シ証人同行スルヿヲ肯セサル時ハ呼出シ

法學士宮崎審査局

應セサル者ト看做シ第百七十九條ニ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ

第百八十九條　第百五十九條第百五十六條ノ規則ハ証人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百八十九條　皇族勅任官証人ヲ訊ル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

第百八十九條　書記ハ証人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作ル可シ

其調書ニハ証人宣誓ヲ為シタルヿ又ハ為サ

法學士宮崎審査局

サルノ事由ヲ記載スヘシ

第百八十八條　豫審判事ハ證人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ知ラシムル為メ書記ヲシテ調書ヲ朗讀セシムル可シ

證人ハ理由ヲ陳述シ其陳述ヲ變更增減シ又ハ書記ハ其請求アリタシ丁ヲ請求スルヲ得但

ルトキハ變更增減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ證人ト共ニ署名捺印スル可シ若シ證人署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

第百九十三條　證人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルヲ得

若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高ニ等キ償金ヲ要ムルヲ得

本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

第七節　鑑定

第百九十四條　豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル為メ鑑定人ヲ必要ナリトスル時ハ學術職業ニ因リ鑑定スルヲ得

治罪法草案審査局

ヘキ者一名又ハ数名ヲシテ鑑定ヲ為サシム可シ

第百九十五條　鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ命スルヿ及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡ス可キヿヲ記載ス可シ

鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第百七十九條ノ規則ニ後ヒ處分ス可シ但勾引狀ヲ發スルヿヲ得ス

第百九十六條　鑑定人ハ正實ニ鑑定ス

可キノ宣誓ヲ為ス可シ其宣誓ハ第百八十三條ノ式ニ從フ

書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルヿヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記載シ之ニ宣誓書ヲ添置ク可シ

第百九十七條　鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シタルヿヲ鑑定ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ付テハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

第百九十八條　第百八十四條第百八十五條ニ

記載シタル者ニハ鑑定ヲ命スルヿヲ得ス但
急遽ノ際正當ノ鑑定人ト為ル可キ者ナキ
時ハ事實參考ノ為ノ鑑定ヲ命スルヿヲ得
第百九十九條　豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立
會フ可シ
第二百條　豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又
ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ增加シ又ハ別人ヲシ
テ鑑定セシムルヿヲ得
第二百一條　鑑定人ハ鑑定書ヲ作リ其手續結
果及ヒ鑑定ヲ為シタル時間ヲ詳記ス可シ

若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載
ス可シ
鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ
作リ又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載
ス可シ
第二百二條　鑑定人ハ鑑定書ニ年月日時ヲ記

載シ署名捺印及ヒ契印ス可シ

又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日時ヲ記載シ書記ト共ニ檢印ス可シ

鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置ク可シ

外國人鑑定ヲ為シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シタル通譯人ノ作リタル譯本ヲ添置ク可シ

第二百三條　鑑定人及ヒ通譯人ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與ス可シ

第八節　現行犯ノ豫審

治罪法草案審査局

第二百四條　豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪軽罪アルヿヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待タス直ニ其旨ヲ通知シタル上ニテ豫審ニ取掛ルヿヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ発シ其他此章ニ定メタル規則ニ従ヒ豫審ノ処分ヲ為スヿヲ得

第二百五條　前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ軽罪タルヿヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審ヲ續ヲ継續ス可キ者ニ非ラルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ従ヒ之ヲ終結ス可シ

第二百六條　檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪軽罪アルヿヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツヿナク其者ヲ通知シ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ属スル處分ヲ為スヿヲ得但罰

金ノ言渡ヲ為スヿヲ得ス

證人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルヿナ

シ之ヲ聽クヿ可シ

第二百七條　前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致スヿ可シ

第二百八條　第二百六條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フヿヲ得但令狀ヲ發スルヿヲ得ス

司法警察官ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ被告人ト共ニ速ニ之ヲ檢事ニ送致スヿ可シ

第二百九條　檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作リタル上其勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致スヿ可シ若シ起訴ヲ為スヿ可カラサル者ト認メタル時ハ直ニ被告人ヲ放免スヿ可シ

第二百十條　豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問スヿ可シ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルヿヲ得

第二百十一條　豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ為シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ為スヿヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置クヿ

第二百十二條　檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラス被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタル時ハ直ニ輕罪裁判所ニ呼出スヿヲ得

第九節　保釋

第二百十三條　豫審判事ハ豫審中勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷ス可キノ證書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スヿヲ得

被告人不能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルヿヲ得

第二百十四條　前條ノ證書ハ書記局ニ之ヲ差出ス可シ

保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四

時前ニ其報知ヲ為ス可シ

第二百十五條　保釋ノ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證セシム可シ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載ス可シ

第二百十六條　保證ヲ為スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保證金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ書記局ニ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スヿヲ得

治罪法草案審査局

第二百十七條　保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ保證金ノ全部又ハ幾分ヲ没入ス可シ

第二百十八條　保證金ヲ没入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キタル上ニテ豫審判事其言渡ヲ為ス可シ

若シ他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徴收ス可シ

第二百十九條　豫審判事ハ保證金ヲ没入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スヿヲ必要ナリトスル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル上ニテ其言渡ヲ取消ス可シ

治罪法草案審査局

第二百二十條　豫審判事ハ保證金ヲ没入シタル後免
許ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ
軽罪ニ付キ軽罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ為シタル時ハ檢事ノ
意見ヲ聽キ~~タル上~~前ニ没入シタル金額ヲ還付スヘシ

第二百二十一條　豫審判事ハ免許ノ言渡違警罪
裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ軽
罪ニ付キ軽罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ為シ若ク
ハ保釋ノ言渡ヲ取消シタル時ハ保證金ヲ還
付スヘシ

第二百二十二條　豫審判事ハ保釋ノ請求アル
ト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ~~タル上~~
テ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルヿヲ
得

第十節　豫審終結

第二百二十三條　豫審判事ハ被告事件其管轄
ニ非スト認メ又ハ他ニ取調ヲ要スルヿナシト
思料~~シタル~~時ハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ
意見ヲ求ムル為メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス
可シ

檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日内ニ之ヲ

還付ス可シ

第二百二十四條　檢事ハ豫審充分ナラスト思料シタル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルヿヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十五條　豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第二百二十六條　豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルヿヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ勾留ヲ要スル者ト認メタル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

第二百二十七條　豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ為シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ當然之ヲ放免ス可シ

一　犯罪ノ證憑充分ナラサル時

二　被告事件罪ト為ラサル時

三　公訴ノ期滿免除ト得タル時

法學博士 岩田宙造 蔵書

四　確定裁判ヲ經タル時

五　大赦アリタル時

六　法律ニ於テ其罪ヲ免スル時

本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ訴ヲ為スヿヲ得ス

第二百二十八條　被告事件違警罪ナリト思料スル時ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ為シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ當然之ヲ釋放ス可シ

第二百二十九條　被告事件軽罪ナリト思料スル時ハ軽罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ為ス可シ被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ト思料スル所ハ當然之ヲ釋放ス可シ又禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料スル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ為スヿヲ得

若シ被告人未タ勾留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ發スルヿヲ得

第二百三十條　被告事件重罪ナリト思料スル時ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ為ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ為シタル時ハ其言

渡ヲ取消スヘ可シ

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ニ為シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置スヘキヲ記載スヘシ

第二百三十一條　豫審終結ノ言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付スヘシ

管轄ニ非サルノ言渡ヲ為スニハ其原由及ヒ被告人ヲ勾留スヘキ時ハ其原由ヲ明示スヘシ

免訴ノ言渡ヲ為スニハ被告事件罪ト為ラサルヿ公訴受理スヘカラサルヿ及ヒ其原由又

犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ其旨ヲ明示スヘシ

違警罪裁判所軽罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ為スニハ犯罪ノ性質模様證憑ノ充分ナルヿ及ヒ其罪ヲ罰スヘキ法律ノ正條ヲ明示スヘシ

第二百三十二條　前條ノ言渡書ニハ第百三十三條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示スヘシ

第二百三十三條　書記ハ豫審終結ノ言渡書ノ

治罪法草案審査局

謄本ヲ速ニ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送致ス可シ但第二百十九條ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ為スヿヲ得

第二百三十四條　被告人ヲ逮捕スルヿ能ハサル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ為シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被告人ハ現ニ勾留ヲ受クルニ非サレハ其言渡ニ對シ上訴ヲ為スヿヲ得ス

第二百三十五條　前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フ可キヿヲ民事裁判所ニ請求スルヲ得

第二百三十六條　豫審終結ノ言渡ヲ為シタル時ハ豫審判事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

又十五日ヨリ未決ノ豫審事件ニ付キ簡略ナル報告書ヲ差出ス可シ

第四章　豫審上訴

第二百三十七條　左ノ場合ニ於テハ檢事又ハ被告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ何時ニテモ

故障ヲ為スヿヲ得

一 管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時

二 法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時

三 法律ニ背キ保釋責付ヲ為シ又ハ之ヲ為サヽル時

四 越權ノ處分アル時

民事原告人ハ第四ノ場合ニ於テ故障ヲ為スヿヲ得

第二百三十八條 故障ヲ為サントスル者ハ其裁判所ノ書記局ニ趣意書ヲ差出スヿヲ可シ

故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ謄本ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スヿヲ得

故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責付ヲ為シタルニ付キ檢事ヨリ故障アリタル時ハ其執行ヲ停止ス

第二百三十九條 故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以上ニテ趣意書答辯書其他訴訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決ス

可シ

會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫審終結ノ言渡アリタル後上告ヲ為スヿヲ得

第二百四十條　左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ豫審判事ヲ忌避スルヿヲ得

一　豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナル時

二　豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ト叶ル時

三　豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ是等ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非スト雖モ贈物ヲ收受ヒ若クハ聽許シタル時

第二百四十一條　忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ為ス可シ但其申立ヲ為スニハ趣意書二通ヲ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事

ハ其送致ヲ受ケタルヨリ二十四時内ニ其申立ヲ認可シ又ハ棄却スルヿヲ趣意書ノ紙尾ニ記載シ其一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送達ス可シ

第二百四十二條　豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其申立人ヨリ故障ヲ為スヿヲ得

會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辯明書ニ依リ判決ヲ為ス可シ

第二百四十三條　豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申立ヲ棄却シタルニ付キ故障アリタル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ継續ス可シ但終結ノ言渡ヲ為スヿヲ得ス

又急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルヿヲ得

第二百四十四條　會議局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル時ハ上告ヲ為スヿヲ得但豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ為スヿヲ得ス

第二百四十五條　豫審判事自ラ第二百四十條ニ定メタル原由アルヿヲ認メ又ハ回避ス可

治罪法草案審査局

キ者ト思料シタル時ハ會議局ニ回避ノ申立ヲ為スヲ可シ

回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決スヲ可シ

第二百四十六條　會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ為サシムヲ可シ但其判事ハ檢事其他訴訟関係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ前豫審判事ノ爲シタル処分ニ取調ヲ為スヲ得

第二百四十七條　書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事

其他訴訟關係人ヨリ會議局ニ申立テ之ヲ忌避スルヲ得

第二百四十八條　檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スルヲ得スヲ可キ者ト思料シタル時ハ會議局ニ其旨ヲ申立ツルヲ得

檢事補自ラ回避スヲ可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツヲ可シ但檢事ハ其申立ヲ許否スヲ可シ

第二百四十九條　檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡

ニ對シ故障ヲ為スヿヲ得

民事原告人ハ私訴ノ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ為スヿヲ得

被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ為スヿヲ得輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄違越權又ハ其事件ヲ移スヿ可キ裁判所ノ管轄違ニ非サレハ故障ヲ為スヿヲ得ス

第二百五十條　故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達アリタルヨリ之ヲ起算ス

第二百五十一條　檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ為スニハ申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スヿヲ得

第二百五十二條　故障アリタル時ハ其對手人ヨリ故障ノ判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ故障ヲ為スヿヲ得

治罪法草案審査局

附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スヿヲ得

第二百五十三條　豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内又故障アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス但被告人ヲ勾留シ又ハ保釋責付ヲ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セス

第二百五十四條　書記ハ故障趣意書答辯書其他訴訟書類ヲ會議局ニ差出ス可シ

第二百五十五條　會議局ニ於テハ第二百三十九條ノ規則ニ從ヒ故障ノ判決ヲ為ス可シ豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若シ其全部又ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ為ス可シ

又被告人ヲ保釋責付シ又ハ勾留スルノ言渡ヲ為スヿヲ得

第二百五十六條　會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ヲシテ更ニ豫審ヲ為シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ為シ其報告書ヲ差出サシム可シ

第二百五十七條　會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄違越權又ハ公訴受理スヘカラサルヿヲ發見シタル時ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ言渡ヲ取消スヿヲ得

第二百五十八條　會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケサル者アルヿ附帶又ハ附帶ニ非サル犯罪ニ付キ豫審ヲ受ケサル者アルヿヲ發見シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ

會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決ス可シ

第二百五十九條　故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ

第二百六十條　檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第二百六十一條　被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴スルヲ得ヘキヿ及ヒ

其期限ヲ記載スヘシ其記載ナキ時ハ規則ニ
從ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマテ被告人上訴
ノ権ヲ失フヿナカルヘシ

第二百六十二條　第三百十四條ヨリ第三百十
六條マテノ規則ハ豫審ノ上訴ニ付テモ亦之
ヲ適用ス

第二百六十三條　重罪裁判所ニ移スヘキノ言
渡確定シタル時ハ檢事其言渡書ニ一切ノ書
類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所ノ檢事長ニ送
致スヘシ

治罪法草案審査局

檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ
重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命スヘシ
重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スヘキノ言渡
確定シタル時ハ檢事速ニ其執行ヲ為スヘシ

第二百六十四條　豫審ニ於テ被告人免訴ノ言
渡ヲ受ケ其言渡確定シタル時ハ罪名ノ變更
アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受クルヿ
ナカルヘシ但新ナル證憑アル時ハ此限ニ在
ラス

新ナル證憑アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ

治罪法草案審査局

差出シ會議局ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ
否ヲ判決ス可シ

法學士審査局

第四編　公判

第一章　通則

第二百六十五條　訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ
登記シタル順序ニ從ヒ之ヲ公判ニ付ス可シ
裁判所長ハ未決勾留ノ日數ヲ減縮スル爲メ
職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヿヲ得
又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟関係
人ノ請求アリタル時モ亦順序ヲ變更スルヿ
ヲ得

第二百六十六條　重罪輕罪違警罪ノ訊問辯

治罪法草案審査局

論及ヒ裁判言渡ハ之ヲ公行ス否ラサル時
ハ其言渡ノ効ナカルヘシ
第二百六十七條　被告事件公安ヲ害シ又ハ猥
褻ニ渉リ風俗ヲ害スルノ恐アル時ハ裁判所
ニ於テ検察官ノ請求ニ因リ又ハ職権ヲ以テ
其訊問及ヒ辯論ノ傍聽ヲ禁スルヿヲ得其裁
判言渡又ハ陪審ノ申立書ヲ朗讀スルニ當テ
ハ傍聽ヲ許ス可シ
第二百六十八條　被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ
拘束ヲ受クルヿナシ但守卒ヲ置クヿアル可

シ
禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ
非スシテ出廷ヲ肯セサル時ハ之ヲ引致スル
ヿヲ得若シ出廷シタル上ハ辯論スルヿヲ
肯セサル時ハ對審トシテ裁判言渡ヲ為ス可
シ
第二百六十九條　被告人ハ辯論ノ為メ辯護人
ヲ用フルヿヲ得
辯護人ハ裁判所々属ノ代言人中ヨリ之ヲ選任
ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ

第二百七十條　被告人公廷ニ於テ暴行又ハ喧噪ヲ為シ辯論ヲ妨礙スル時ハ裁判長ヨリ再度告戒ヲ為シ仍ホ之ニ從ハサル時ハ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被告人ヲ退廷セシメ若シハ勾留スルヿヲ得

前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辯論及ヒ裁判言渡ヲ為スヿヲ得

若シ辯論二日ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ

第二百七十一條　被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出廷スルヿ能ハサル時ハ痊癒ニ至ルマテ辯論ヲ停止ス

辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタル時ハ其痊癒ノ後新ニ辯論ヲ為ス可シ其他ノ疾病ニ罹ル時ハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ為ス可シ但五日間辯論ヲ停止シ又ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時ハ新ニ辯論ヲ為ス可シ

若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯

論ヲ終リタル時ハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ為スヿナク裁判言渡ヲ為ス可シ

第二百七十二條　禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時ニ出廷セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタルノ證アルニ非サレハ闕席裁判ヲ為ス可カラス

豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スルヿ能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限内ニ被告人出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ為ス可キノ告知書ヲ親屬若クハ戸長ニ送達ス可シ

第二百七十三條　闕席シタル被告人ニ付テハ辨護人ヲ用フルヿヲ許サス但其親屬故舊ハ被告人ノ出廷スルヿ能ハサルノ事由ヲ證明スルヿヲ得

裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判ヲ延期スルヿヲ得

第二百七十四條　被告人中ノ一名又ハ數名出廷セスト雖モ出廷シタル者ニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ為ス可シ

第二百七十五條　裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ為メ相當ノ處置ヲ為ス可シ

稱賛誹謗其他辯論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退廷セシムルヿヲ得

第二百七十六條　公廷ニ於テ軽罪違警罪ヲ犯シタル者アル時ハ其身分ノ如何ニ拘ハラス裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押ヘ檢察官ノ意見ヲ聽キ直ニ裁判ヲ為シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ為ス可シ

書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ル可シ

第二百七十七條　前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ為シ軽罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ為ス可シ

軽罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ軽罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ為ス可シ

第二百七十八條　公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ作リ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル為メ豫審判事ニ送付スルノ

言渡ヲ為スヿヲ可シ

第二百七十九條　裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲ為スヿヲ可カラス但辯論ニ因リ發見シタル附帶ノ事件及ヒ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス

若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルヿヲ得

第二百八十條　檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理スヿヲ可カラサルノ申立ヲ為スヿヲ得

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理スヿヲ可カラサルノ言渡ヲ為スヿヲ得

第二百八十一條　裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直ニ控訴又ハ上告ヲ為スヿヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辨論ヲ停止ス

第二百八十二條　檢察官其他訴訟關係人ハ第二百四十條ニ定メタル原由アル時ハ違警罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判

所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ為
スヿヲ得
豫審ヲ為シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ
始審裁判ヲ為シタル裁判官其終審裁判ニ干
預シタル時亦同シ
第二百八十三條　忌避ノ申立ハ本案ノ裁判
言渡ニ至ルマテ何時ニテモ之ヲ為スヿ
ヲ得
忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辨論ヲ停止
ス

第二百八十四條　忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其
判決ヲ為スニハ第二百四十一條第二百四十
二條及ヒ第二百四十四條ヨリ第二百四十八
條マテニ定メタル規則ニ從フ
第二百八十五條　忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却
シタル時ハ前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續
ニ取消ル可シ但五日間辨論ヲ停止シタル時
ハ新ニ辨論ヲ為ス可シ
變災厄難ノ為メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦
同シ

第二百八十六條　公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可キ證據ニ同シ

第二百八十七條　裁判長ハ檢察官其他訴訟関係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作リタル調書及ヒ檢證書類ヲ朗讀セシムルヿヲ得

是等ノ書類ハ原被證人ノ陳述ト同一ノ効ヲ有ス

第二百八十八條　調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟関係人ヨリ證人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出スヿヲ得

豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟関係人ヨリ其裁判所ノ允許ヲ得タル時ニ其調書說明ノ為メ出廷サシムル之ヲ呼出スヿヲ得

第二百八十九條　豫審ニ於テ訊問シタル證人ハ更ニ之ヲ呼出スヿヲ得

豫審ニ於テ録取シタル證人ノ陳述書ハ更ニ其證人ヲ呼出サヽル時證人呼出ヲ受ケ出廷

セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於テノ陳述ヲ
比較ス可キ時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請
求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀
セシムルヿヲ得

第二百九十條　第百八十一條ヨリ第百九十一
條マテノ規則ハ公判ニ付キ出廷シタル證人
ニモ亦之ヲ適用ス

第二百九十一條　證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カ
ラス又陳述前辯論ニ立會フ可カラス

第二百九十二條　證人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問

ス可シ

一　檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

二　民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル
證人

三　被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ
呼出シタル證人

第二百九十三條　證人數名アル時ハ氏名目録
ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ但裁判長ハ
證人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ
變更スルヿヲ得

第二百九十四條　證人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問スルヿヲ得ス

陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告ケ又ハ證人及ヒ被告人ヲ訊問スルヿヲ得

訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル為メ證人ヲ訊問スヿ可キヿヲ裁判長ニ求ムルヿヲ得

第二百九十五條　證人及ヒ被告人聾者唖者又ハ國語ニ通セサル者ナル時ハ通譯人ヲ命スヿ可シ此場合ニ於テハ第百五十九條第百六十

條第百八十九條ニ定メタル規則ニ從フ

第二百九十六條　證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

其證人ノ陳述ハ第百九十一條第百九十二條ノ規則ニ從ヒ書記之ヲ録取シ豫審判事ニ送致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡シ又本案ノ事件重罪ナル時ハ更ニ他ノ陪審ニ付スヘキノ言渡ヲ為スヿヲ得

第二百九十七條　證人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ罰金ヲ言渡スヘシ但其言渡ニ付テハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

一　違警罪事件ニ付テハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料

二　輕罪以上ノ事件ニ付テハ二圓以上十圓以下ノ罰金

被告人闕席シタル時ハ其呼出シタル證人出廷セスト雖モ罰金ヲ言渡スヘカラス

第二百九十八條　前條ノ言渡書ハ書記ヨリ之ヲ證人ニ送達スヘシ

證人其言渡書ノ送達ヲ受ケタルヨリ三日内ニ出廷スルヿ能ハサリシ正當ノ事由ヲ證明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽

キ罰金ノ言渡ヲ取消スヲ可シ但重罪裁判所閉
廳ノ後ハ其開廳シタル裁判所ニ其申立ヲ為
スヲ可シ

第二百九十九條　第二百九十七條ノ場合ニ於
テハ證人ヲ呼出シタル檢察官其他訴訟関係人
ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職権ヲ以テ公判
ヲ延期スルノ言渡ヲ為スヿヲ得
檢察官自ラ其請求ヲ為サヽル時ハ公判ノ延
期ニ付キ意見ヲ陳述スヲ可シ

第三百條　證人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セ
サル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル
罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡ス
可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ
公判ヲ延期スルヿヲ得但延期シタル時ハ其
證人ニ對シ勾引狀ヲ發スヲ可シ

第三百一條　第百九十四條以下ノ規則ハ公判
ニ於テ新ニ命シタル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス
但呼出ニ應セサル時ハ第二百九十七條ノ規
則ニ從ヒ處分スヲ可シ

鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ説明ノ為メ

更ニ之ヲ呼出ス時ハ證人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分可

第三百二條　被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ニ定ムル可シ

裁判長ハ事實發見ノ爲ノ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヿヲ得

第三百三條　證憑調濟ノ上檢察官民事原告人被告人其辯護人及ヒ民事擔當人ハ順次發言ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルヿヲ得ス

檢察官其他訴訟關係人ハ迭ニ辯論ヲ爲スヿヲ得但辯論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人ヲシテ發言セシム可シ

治罪法草案審査局

第三百四條　檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ

第三百五條　辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直ニ之ヲ判決ス可シ但其判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヿヲ得ス

第三百六條　民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス何時ニテモ其訴訟ニ關係スルヿヲ得

又民事原告人ハ民事擔當人ヲシテ其訴訟ニ關係セシムルヿヲ得

若シ異議ノ申立アル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ其判決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直ニ控訴又ハ上告ヲ爲スヿヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

治罪法草案審査局

第三百七條　裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ為スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ證憑ヲ明示スヘシ

重罪裁判所ノ言渡ニ付テハ陪審ノ申立ヲ明示シ別ニ證憑ヲ示スヿヲ要セス

免訴又ハ不問ノ言渡ヲ為スニ付テモ亦第一項ノ例ニ從フ

第三百八條　無罪ノ言渡ヲ為スニハ其理由トシテ被告人ニ對シ犯罪ノ證憑ナキヿ又重罪事件ニ付テハ陪審ヨリ無罪ノ申立アリタルヿヲ明示スヘシ

第三百九條　裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判言渡ヲ為スヘシ

私訴ニ付キ取調未タ充分ナラサル時ハ公訴ノ裁判アリタル後其裁判言渡ヲ為スヿヲ得

第三百十條　被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當スヘキノ言渡ヲ為スヘシ

無罪免訴又ハ不問ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニテ之ヲ擔當スヘシ

治罪法草案審査局

私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ擔當ス可シ

第三百十一條　被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トヲ問ハス没收ニ係ラサル差押物品ハ所有者ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ為ス可シ

第三百十二條　本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内又上訴アリタル時ハ其判決アルマテ裁判執行ヲ停止ス

第三百十三條　禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡シタル時ハ現ニ捕ニ就クニ非サレハ上訴ヲ為スヿヲ得ス

第三百十四條　勾留ヲ受ケタル者上訴ヲ為シ又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其申立書ヲ監獄長ニ差出シ監獄長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出ス可シ

第三百十五條　訴訟関係人又ハ其代人非常ノ變災危難ニ因リ上訴期限ヲ経過シタル場合ニ於テ其旨ヲ證明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルヿヲ得

治罪法草案官纂

但變災厄難ヲ免レタルヨリ通常ノ期限内ニ
其證據ヲ申立書ニ添ヘ上訴ヲ為ス可シ
第三百十六條　書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對
手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辯書
ヲ差出スヿヲ得
上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニ
檢察官ノ意見ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理ス
可キヤ否ヲ判決ス可シ
上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記
ヲシテ其旨ヲ訴訟關係人ニ通知セシメ通常

ノ規則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ為ス可シ
上訴ヲ受理ス可カラサル者ト判決シタル時
ハ他ノ原由アルニ非サレハ即時ニ裁判執行
ヲ為サシム可シ
第三百十七條　裁判言渡ハ辯論ヲ終リタル後
公廷ニ於テ即時ニ之ヲ為シ又ハ次日ニ之ヲ
為ス可シ
裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作リ書記
ト共ニ署名捺印ス可シ
裁判言渡書ニハ其言渡ヲ為シタル裁判所年

月日其事件ニ干預シタル檢察官ノ氏名及ヒ
重罪事件ニ付テハ陪審ノ氏名ヲ記載スヘシ

第三百十八條　訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁
判言渡書ノ謄本又ハ其抜書ヲ求ムルヿヲ得
但上訴ノ為メ其求ヲ為シタル時ハ書記ヨリ
二十四時内ニ之ヲ下付スヘシ

第三百十九條　對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリ
タル時ハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ
前條ノ請求及ヒ其言渡ニ對シ控訴又ハ上告
ヲ為スヲ得ヘキヿ及ヒ其期限ヲ告知シ又闕
席裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ其言渡
ニ對シ故障ヲ為スヲ得ヘキヿ及ヒ其期限ヲ
言渡書ニ記載スヘシ

若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ
從ヒ其告知アルマテ上訴期限ノ經過ヲ停止
ス

第三百二十條　書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判
始末書ヲ作リ左ノ條件其他一切ノ訴訟手續
ヲ記載スヘシ

一　裁判ヲ公行シタルヿ又ハ傍聽ヲ禁ス

ル言渡アリタルヿ及ヒ其事由

二　被告人ノ訊問及ヒ其陳述

三　證人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ為サヽル時ハ其事由

ルヿ若シ宣誓ヲ為サヽル時ハ其事由

四　原被ノ證據物件

五　辯論中異議ノ申立アリタルヿ後日ヲ期シテ申立ツ可キ事件ヲ申立タルヿ是等ノ事件ニ付キ檢察官其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決

六　辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ發言セシメタルヿ

第三百二十一條　公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外言渡ヲ為シタル裁判所年月日裁判長陪席判事檢察官書記ノ氏名及ヒ重罪事件ニ付テハ陪審ノ氏名ヲ記載ス可シ

辯論數日ニ渉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シ且重罪事件ニ付テハ同一ノ陪審出席シタルヿヲ記載ス可シ

治罪法草案審査局

辨論中豫備判事又ハ豫備陪審
ヲシテ代ラシメタル時ハ其
旨ヲ記載スヘシ檢察官及ヒ書
記ニ付テモ亦同シ

第三百二十二條 公判始末書ハ裁判
言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓シ
裁判長及ヒ書記署名捺印スヘ
シ

裁判長ハ署名捺印セサル以前
ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意

見アル時ハ其紙尾ニ記載スヘ可
シ

第三百二十三條 裁判言渡書及ヒ公判
始末書ノ正本ハ其裁判所ノ書記局
ニ保存スヘ可シ

上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記
裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ謄本
ニ認印シ之ヲ上訴書類
ニ添フヘ可シ

第二章 違警罪公判

治罪法草案審査局

第三百二十四條　違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一　檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二　豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移ス

第三百二十五條　呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名職業住所出廷ノ日

時被告事件及ヒ代人ヲシテ出廷セシムルヿヲ得ヘキ旨ヲ記載ス可シ若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未タ其證人ヲ呼出サヽル時ハ公廷ニ於テ其事件ノ告知ヲ受クタル上其呼出及ヒ辨護ノ為メ二十日ノ猶豫ヲ求ムルヿヲ得

第三百二十六條　呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

第三百二十七條　違警罪裁判官ハ被告事件急

速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛ル前檢察官其他
訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ對
手人ノ立會ヲ要セスシテ檢證處分ヲ為スヿ
ヲ得

第三百二十八條　證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷
トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼
出ス可シ

又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊
問前其名刺ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判所
ニ於テ證人トシテ其陳述ヲ聽クヿヲ得

第三百二十九條　書記ハ各事件コトニ訴訟關
係人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ若シ其呼立ニ應セ
サル時ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事
件ヲ裁判ス可シ

第三百三十條　違警罪裁判官ハ最初ニ被告人
ノ氏名年齡身分職業住所出生ノ地ヲ訊問ス
可シ

官吏ノ作リタル調書又ハ申立書アル時ハ書
記之ヲ朗讀ス可シ

檢察官ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

第三百三十一條　違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヲ訊問ス可シ

若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面ヲ差出ス可シ

第三百三十二條　被告人ノ白狀アル時ハ他ノ證憑ヲ差出スニ及ハス但裁判所ニ於テハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出サシムルヿヲ得

若シ白狀ナキ時ハ原被ソ證人ヲ訊問シ其他證憑アル時ハ之ヲ差出ス可シ

第三百三十三條　檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辨ヲ爲ス可シ

第三百三十四條　呼出ヲ受ケタル被告人民事擔當人又ハ其代人出庭セサル時ハ檢察官及ヒ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽キ闕席裁判ヲ爲ス可シ

民事原告人出庭セサル時亦同シ

第三百三十五條　闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ闕席シタル者又ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ

闕席裁判ヲ受ケタル者故障ヲ爲サントスル時ハ言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ其申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

第三百三十六條　裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ若シ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヨリ故障アリタル旨及ヒ其事件ヲ公判ニ付ス可キ日時ヲ故障ノ對手人ニ通知スル爲メ呼出狀ヲ送達ス可シ但其送達ト出庭トノ間少クモ二日ノ猶豫アル可シ

又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ

第三百三十七條　故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第三百二十九條ヨリ第三百三十三條マテノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

其裁判ニ闕席シタル者ハ故障ヲ爲スヿヲ得

法學部蔵書

ス

第三百三十八條　犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十七條第二以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十九條　被告事件違警罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百四十條　被告事件重罪又ハ輕罪ナリト

治罪法草案審査局

スル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判所ニ檢事ニ送致ス可シ但被告人ニ對シ勾引狀ヲ發スルヿヲ得

第三百四十一條　違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴スルヿヲ得

一　被告人ハ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時

二　民事原告人及ヒ被告人ハ民事擔當人ノ言渡民事上治安判事ノ要償ニ付テノ言渡

治罪法草案審査局

權内ニ屬スル終審ノ金額ヲ超過シタル時

三　檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル原由アラサル時ト雖モ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百四十二條　控訴ヲ爲サントスル者ハ原裁判所ノ書記局ニ其申立書ヲ差出ス可シ但其申立ノ期限ハ對審裁判ニ付テハ言渡ヨリ三日内又闕席裁判ニ付キ故障アラサル時ハ

本人ヲ送達書ヲ見サル者ハ相當ノ理由ト見做スベシ

本人又ハ其住所ニ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス

控訴ヲ爲スノ申立アリタル時ハ書記ヨリ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

第三百四十三條　訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ書記ニ之ヲ送致ス可シ

若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時ハ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ檢察官ニ其意見書ヲ差出ス可シ

第三百四十四條　控訴ヲ受ケ可キ裁判所ニ於テハ書記局ヨリ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル上ニテ其裁判ニ取掛ル可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クモ二日ノ猶豫アル可シ

證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百四十五條　控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマテ何時ニテモ附帶ノ控訴ヲ為スヿヲ得但附帶ノ控訴ハ公廷ニ於テ直ニ之ヲ申立

治罪法草案審査局

ルヿヲ得

第三百四十六條　控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲ為スニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得タル上ニ非サレハ新ナル證人又ハ始審ニ於テ陳述シタル證人ヲ呼出スヿヲ得ス

第三百四十七條　控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原裁判言渡ヲ認可スルノ言渡ヲ為シ又ハ之ヲ取消シタル上ニテ更ニ裁判言渡ヲ為

治罪法草案審査局

ス可シ

被告人ハシ控訴ヲ為シタル時ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡スコヲ得ス

私訴ニ付テノ控訴ノ裁判ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第三百四十八條　第三百三十四條以下ニ定メタル規則ニ控訴ノ闕席裁判ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第三百四十九條　檢察官其他訴訟関係人ハ違警罪事件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ為スコヲ得

第三章　輕罪公判

第三百五十條　輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一　檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二　豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ為ス言渡

第三百五十一條　呼出狀ニ付テハ第三百二十

五條第三百二十六條ノ規則ニ從フ

第三百五十二條　被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ時ハ代人ヲシテ出廷セシムルヿヲ得ヘキ旨ヲ呼出狀ニ記載ス可シ

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルヿヲ得

第三百五十三條　證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百五十四條　第三百二十七條ノ規則ハ豫審ヲ經サル輕罪事件ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十五條　檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齡職業住所及ヒ出生ノ地ヲ問ヒタル後被告事件ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明ス可シ

調書又ハ申立書アル時ハ書當記ヲシテ之ヲ朗讀セシメ次ニ原被證人ノ陳述ヲ聽キ且證據物件ヲ被告人ニ示シ辨解ヲ爲サシム可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ答辨ヲ爲ス可シ

第三百五十六條　檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ

其意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ要償ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ辯ヲ求メ答ヘルヿヲ得

第三百五十七條　罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人

又ハ第二百七十二條ノ規則ニ從ヒ闕席裁判

ヲ為スヿヲ得ヘキ被告人其呼出ノ日時ニ出

廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十八條　闕席裁判ニ関スル第三百三

十四條ヨリ第三百三十七條マテノ規則ハ此

章ニモ亦之ヲ適用ス

治罪法草案審査局

第三百五十九條　闕席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ

言渡ヲ受ケタル被告人ハ左ノ場合ヲ除クノ

外刑ノ期満免除ニ至ルマテ故障ヲ爲スヿヲ

得

一　被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ

事件ヲ申立タル時

二　裁判言渡書ヲ本人ニ送達シタル時

三　被告人裁判執行ニ因リ刑ノ言渡アリ

タルヿヲ知リタルノ證アル時

第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタ

治罪法草案審査局

ルヨリ第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヿヲ知リタルヨリ三日内ニ故障ヲ為スヿヲ得

第三百六十條　裁判所ニ於テ事實発見ノ為メ必要ナリトスル時ハ檢察官其他訴訟関係人ノ請求ニ因リ又ハ職権ヲ以テ新ナル證人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命シ若クハ臨檢ヲ為スヿヲ得但是等ノ処分ヲ為スニ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ

又豫審ヲ經サル事件ニ付テハ豫審判事ヲシテ其指示スル所ノ條件ニ付キ取調ヲ為シ且其報告書ヲ差出サシムルヿヲ得

第三百六十一條　犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ為ス可シ

又第二百二十七條第二以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ為ス可シ

本條ノ場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ為ス可シ

第三百六十二條　被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡ヲ為シ且被告人勾留ヲ受

ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ為ス可シ

第三百六十三條　被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ為シ若シ豫審ヲ経サル時ハ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ為ス可シ但被告人勾留ヲ受ケサル時ハ勾引狀ヲ發ス可シ訴訟書類及ヒ證據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第三百六十四條　被告事件豫審ヲ経タル時ハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ為ス可シ

會議局ニ於テハ第二百五十六條第二百五十八條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ為シ被告人ヲ管轄裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ為ス可シ

第三百六十五條　會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル場合ニ於テ新ナル證憑ヲ発見スルヿナクシテ其事件ヲ重罪ナリトスル時ハ管轄違ノ言渡ヲ為ス可シ

檢事ハ大審院ニ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ為ス可シ

治罪法草案審査局

第三百六十六條　前二條ノ場合ニ於テハ會議
局又ハ大審院ノ判決アルマテ檢察官ノ請求
ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ被告人ヲ其
裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ爲スヿヲ
得
又第二百十三條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付
キ判決ヲ爲スヿヲ得
第三百六十七條　被告事件輕罪ニシテ且證憑
充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可
シ

被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ當然
保釋責付ヲ取消シタル者トス但上訴中更ニ
保釋ヲ求ムルヿヲ得
第三百六十八條　檢察官其他訴訟關係人ハ左
ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シ
控訴裁判所ニ控訴スルヿヲ得
一　檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリ
タル時但違警罪事件トシテ言渡アリ
タル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリ
トスル時

二　被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除ク
ノ外刑ノ言渡ヲ受ケタル時
三　民事原告人被告人及ヒ民事擔当人ハ
要償ノ言渡ニ付テ民事上始審裁判所
ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時
四　検察官其他訴訟関係人ハ管轄違越権
擬律ノ結誤又ハ無効ノ記載アル規則
ニ背キタル時
第三百六十九條　控訴ハ裁判言渡アリタルヨ
リ五日内ニ之ヲ為スヿヲ得

閲席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期満免除ニ至
ルマテ何時ニテモ故障ヲ為サスシテ直ニ控
訴ヲ為スヿヲ得但第三百五十九條ノ場合ニ
於テハ五日内ニ之ヲ為ス可シ
第三百七十條　公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時
ハ検察官ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移ス
可シ
第三百七十一條　第三百四十五條第三百四十
七條ノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百七十二條　輕罪裁判所檢事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ控訴アリタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時ハ其裁判所ノ判事一名ヲレテ豫審ヲ爲サシメ第二百五十八條第二百六十三條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ其報告書ニ依リ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百七十三條　控訴ヲ闕席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ

第三百七十四條　檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第四章　重罪公判

第三百七十五條　重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一　豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

二　控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ

其事件ヲ移スノ言渡

第三百七十六條　重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ左ノ區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ

控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長~~又ハ檢事~~公訴狀ヲ作ル可シ

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作リ又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ檢事ヲシテ之ヲ作ラシム可シ

第三百七十七條　公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一　被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ模樣

二　被告人ノ氏名年齡身分職業住所出生ノ地

三　豫審ニ於テ集取シタル原被ノ證憑

四　罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概畧

第三百七十八條　公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又

ハ被告人ヲ記載ス可カラス

第三百七十九條　重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作リタル上ニテ各別ニ辯論及ヒ陪審ノ商議ヲ為スヿヲ裁判所長ニ請求スルヲ得

裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辯論及ヒ陪審ノ商議ヲ為サシム

法學博士樂宮直君

ルヿヲ得又數箇ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同時ニ辯論及ヒ陪審ノ商議ヲ為サシムルヿヲ得

第三百八十條　書記ハ被告人出廷ヨリ少ク𪜈五日前ニ公訴狀ノ謄本ヲ被告人ニ送達ス可シ被告人數名アル時ハ各別ニ其謄本ヲ送達ス可シ

第三百八十一條　重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタル陪席判事ハ公訴狀ノ送達アリタルヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事

治罪法草案審査局

件ニ付キ被告人ヲ訊問シ且辨護人ヲ選任シタルヤ否ヲ問フ可シ

若シ辨護人ヲ選任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所所屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

被告人及代言人ヨリ異議ノ申立ナキ時ハ代言人一名ヲシテ被告人數名ノ辨護ヲ為サシムルヿヲ得

辨護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辨論ニ取掛ルヿヲ得ス

第三百八十二條　辨護人差支アル時若クハ被告人ヨリ之ヲ改選ス可キ正當ノ事由ヲ申立タル時ハ被告人自ラ辨護人ヲ選任スルニ非サレハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可シ但辨護人ヲ改選シタル時ハ三日間辨論ヲ停止シ若クハ其事件ヲ他ノ陪審ニ付ス可シ

第三百八十三條　書記ハ第三百八十一條ノ場合ニ於テ訊問ノ調書ヲ作リ辨護人ヲ選任スルニ付キ其式ヲ履行シタルヿヲ記載ス可シ

辯論中辯護人ヲ改選シ又ニ辯論ヲ停止シタル時ハ公判始末書ニ其旨ヲ記載ス可シ

第三百八十四條　辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ効ナカル可シ

第三百八十條ヨリ第三百八十二條マテ一定ノ規則ニ從ハサルヿアリト雖モ辯論ニ取掛ル前ニ非サレハ被告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲スヿヲ得ス

第三百八十五條　辯護人ハ第三百八十一條ノ處分アリタル後被告人ト接見スルヿヲ得

又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閲讀シ且之ヲ抄寫スルヿヲ得

辯護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁判言渡アルマテ被告人ト接見スルヿヲ得ス但被告人現ニ囚留ヲ受クル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

第三百八十六條　檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目録ハ開廷ヨリ一日前之ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名
目録ハ同上ノ期限内ニ書記ヨリ之ヲ検察官
ニ送致シ民事ニ付キ呼出シタル證人ノ氏名
目録ハ之ヲ民事原告人ニ送達ス可シ
第三百八十七條　前條ノ規則ニ從ヒ豫メ氏名
ヲ通知セサル證人ノ陳述ハ事實參考ノ為メ
ニ非サレハ之ヲ聽クヿヲ得ス但對手人ヨリ
異議ナキヿヲ申立タル時ハ證人トシテ其陳
述ヲ聽クヿヲ得
第三百八十八條　證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷ノ
間少ノモ二日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ
第三百八十九條　裁判長ハ開廷ノ日ニ當リ公
廷ニ於テ陪席判事検察官及ヒ陪審ノ面前ニ
テ開廷ス可キヿヲ陳述ス可シ但被告人ヲ呼
出ス可カラス
書記ハ本會陪審氏名目録ヲ讀ム可シ
陪審全員出廷シタル時ハ裁判長及ヒ書記本

會陪審氏名目録ニ署名捺印ス可シ

補闕陪審ハ退廷ス可シ

第三百九十條　陪審正當ノ事由ヲ證明セスシテ出廷セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ付テハ故障ヲ許サス

前項ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ本年後期ノ抽籤ヲ免レ、ヿヲ得ス

第三百九十一條　前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達ス可シ

其

前條ノ言渡ヲ受ケタル者出廷スルヿ能ハサリシ正當ノ事由ヲ證明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ但重罪裁判所閉廷ノ後ハ其開廷シタル裁判所ニ其申立ヲ爲ス可シ

第三百九十二條　陪審一名又ハ數名罰金ノ言渡ヲ受ケタル時若クハ正當ノ事由ニ因リ免除セラレタル時ハ速ニ補闕陪審中ヨリ其抽籤ノ順序ニ從ヒ代員ヲ命ス可シ

前項ノ場合ニ於テ陪審及ヒ補闕陪審ノ全数
二十名ニ満サル時ハ二十名ニ充ツ可キ員数
ヲ一周年補闕陪審氏名目録中ヨリ抽籤ス可
シ
新ニ陪審ヲ徵集スルニハ三日間開廳ノ延期
ヲ言渡ス可シ
延期ノ言渡ヲ為シタル場合ニ於テ既ニ出廷
シタル陪審ハ更ニ徵集状ヲ受クルヿナク当
然其期日ニ出廷ス可シ
第三百九十三條　新ナル陪審徵集ノ期日ニハ

法學博士穗積重遠

前ニ定メタル規則ニ從ヒ本會陪審ヲ選定ス可シ
第三百九十四條　本會陪審ヲ選定シタル時ハ被告人
出廷ヨリ少クトモ二十四時前ニ其氏名目録ノ謄本ヲ被告人
ニ送達ス可シ
本條ノ規則ニ從ヒ氏名目録ノ謄本ヲ送達セスト雖モ第四
百一條ノ規則ニ從ヒ裁判陪審ヲ選定シタル後ハ被告人ヨリ
異議ノ申立ヲ為スヿヲ得ス
第三百九十五條　裁判長ハ陪審ヲシテ其職務権限ヲ
知ラシムル為メ第三百九十條第三百九十一條第三百九十
七條ヨリ第四百一條マテ及ヒ第四百三十一條ヨリ第四百四十

法學博士穗積重遠

一條マテノ規則ヲ印刷シテ閲聽ノ日之ヲ各陪審ニ下付ス可シ

第三百九十六條　裁判長ハ陪審ヲシテ宣誓セシムル為メ左ノ宣誓書ヲ朗讀ス可シ

予ノ名誉ト本心トニ從ヒ原被ノ證憑ノ審査ス可キヿ社會ト被告人トノ利益ヲ妨害セサルヿ裁判言渡ニ至ルマテ其干預シタル事件ニ付キ外人ト接セサルヿ愛憎畏懼ノ念ヲ生セサルヿ原被ノ證憑ニ依リ心證ヲ資リ謹テ決答ス可キヿヲ誓フ

各陪審ハ宣誓書ニ署名捺印ス可シ

書記ハ宣誓書ニ年月日及ヒ場所ヲ記載シ裁判長ト共ニ署名捺印シ之ヲ本會陪審氏名目錄ニ添置ク可シ

第三百九十七條　各事件ヿトニ公判ニ取掛ル前公廷ニ於テ裁判官檢察官陪審全員被告人及ヒ辨護人ノ面前ニ於テ本會陪審氏名目錄中ヨリ裁判陪審ヲ抽籤ス可シ

書記ハ出廷シタル各陪審ノ氏名ヲ呼立テ其番号ヲ函中ニ入ル可シ

陪審正當ナル事由ヲ證明セスシテ出廷セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ言渡スヲ可シ若シ本會中再ヒ出廷セサル時ハ其罰金ノ二倍ヲ言渡シ且本會陪審氏名目錄中ヨリ其氏名ヲ削除スヲ可シ

第三百九十條　第三百九十一條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百九十八條　陪審全員ノ番号ヲ函中ニ入レタル後裁判長ハ檢察官及ヒ被告人ニ各自理由ヲ申立ルヿヲ得ヘキヿヲ告知スヲ可シ

出廷シタル陪審ノ員數二十名ニ滿サル時ハ檢察官ノ忌避スヲ可キ員數ヲ減スヲ若シ十五名ニ滿サル時ハ被告人ノ忌避スヲ可キ員數ヲ減スヲ可シ

第三百九十九條　函中ヨリ陪審ノ番号ヲ抽出シ之ヲ讀上ルニ從ヒ一名ヿトニ檢察官被告人順次ニ忌避ノ申立ヲ為スヲ可シ

辨護人ハ被告人ト商議シタル上ニテ被告人

ノ名ヲ以テ忌避ノ申立ヲ為スヿヲ
得
第四百條　被告人数名アル時ハ裁判長
ヨリ被告人又ハ辨護人ノ一名ヲシ
テ忌避ヲ為サシムル為メ高議スヿ可
キヿヲ告知スヿ可シ
若シ其高議一定セサル時ハ各自
忌避ノ申立ヲ為スヿヲ得
第四百一條　忌避ニ係ラサル陪審十名ヲ
以テ裁判陪審トス
陪審長ノ職務ハ第一ノ籤ニ當リタル者之ヲ
行フ若シ其職務ヲ辞スル時ハ抽籤ノ順序ニ
從ヒ之ヲ行フヿ可シ
書記ハ裁判陪審ノ氏名目録ヲ作リ裁判長ト
共ニ署名捺印シ之ヲ訴訟書類ニ添置クヿ可シ
第四百二條　裁判長辨論二日以上ニ渉ル可シ
ト思料スル時ハ裁判陪審抽籤前豫備陪審一
名又ハ二名ヲ抽籤スヿ可キヿヲ言渡スヿヲ得此
場合ニ於テハ検察官ノ忌避スヿ可キ員数ヲ減

ス可シ

豫備陪審ハ陪審ノ次席ニ就キ辯論ニ立會フ可シ但其高議ニ干預ス可カラス

陪審差支アル時ハ豫備陪審抽籤ノ順序ニ從ヒ之ニ代ル可シ

第一項ノ場合ニ於テハ重罪裁判所ノ在ル地ノ裁判所判事一名ヲ以テ豫備陪席判事ト為スヿヲ得

第四百三條　裁判陪審ハ抽籤ノ順序ニ從ヒ其席ニ就ク可シ

第四百四條　裁判官檢察官書記及ヒ陪審各其席ニ就キタル後即時ニ訊問及ヒ辯論ニ取掛ル可シ

裁判長ハ先ツ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

若シ其答辭ト豫審中ノ陳述ト齟齬アリト雖モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ相違ナキ特ハ引續キ辯論ヲ為ス可シ

第四百五條　書記ハ呼出シタル證人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ

其呼立ニ應シタル證人ハ扣席ニ退カシメ陳述ヲ爲スニ當リ順次ニ之ヲ呼入ルヿ可シ

第四百六條　裁判長ハ書記ヲシテ重罪裁判所ニ移スノ言渡書及ヒ公訴狀ヲ朗讀セシムルニ付キ注意シテ聽ク可キヿヲ被告人ニ告知ス可シ

第四百七條　裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタル後被告人ヲ訊問ス可シ

被告人豫審中ニ自狀シタル事件ヲ確認セス又ハ之ヲ取消サントスル時ハ其事由ヲ辨明ヒシム可シ

被告人ノ白狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サヽル可カラス

第四百八條　裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後證憑ヲ差出スニ從ヒ其證憑ニ付キ辨解ヲ爲シ且自己ノ利益トナル可キ反證ヲ差出スヿヲ得ヘキヿヲ被告人ニ告知ス可シ

第四百九條　陪審ハ裁判長ノ允許ヲ得テ證人又ハ被告人ヲ訊問スルヿヲ得但自己ノ意見ヲ発露ス可カラス

第四百十條　陪審辯論中自己ノ意見ヲ発露シ
タル時ハ檢察官被告人ノ請求ニ因リ又ハ裁
判所ノ職權ヲ以テ其陪審ヲ退廷セシム可シ
前項ノ場合ニ於テハ豫備陪審ヲシテ之ニ代
ラシメ若シ豫備陪審アラサル時ハ更ニ裁判
陪審ヲ抽籤ス可シ但自己ノ意見ヲ発露シタ
ル陪審ハ其抽籤ニ加フ可カラス此規則ニ背
キタル時ハ刑ノ言渡ノ効ナカル可シ
第四百十一條　裁判長ハ原告證人陳述ヲ終リ
タルコトニ被告人ニ意見アリヤ否ヲ問フ可

法學博士穗積陳重閲

シ
第四百十二條　證人ハ陳述ヲ為シタル後其和
席ハ留ル可シ但裁判長ヨリ退廷ノ允
許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス
陪席判事檢察官陪審被告人及ヒ民事原告
人ハ更ニ證人ヲ訊問スルヿ又ハ證人ヲ
シテ他ノ證人ト對質セシムルヿヲ請求
スルヲ得
裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ為スヿヲ
得

法學博士穗積陳重閲

第四百十三條　裁判長ハ證人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ於テ充分ナル陳述ヲ為スヿヲ得サル可シト思料スル時ハ検察官　民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其證人ノ陳述中被告人ヲ退席セシムルヿヲ得

裁判長ハ證人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公廷ニ呼入レ其陳述シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申立シム可シ

治罪法草案審査局

第四百十四條　裁判長ハ第三百三條ニ定メタル手續ノ終リタル後公訴ニ付キ辯論ノ終結ヲ宣タルヿヲ言渡ス可シ

第四百十五條　重罪裁判所ニ於テハ辯論終結ノ言渡アリタル後ト雖モ陪審ノ高議室ニ退ク前検察官被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ左ノ原由ニ付キ更ニ本案ノ辯論ヲ為ス可キノ言渡ヲ為スヿヲ得

治罪法草案審査局

一 無効ノ記載アル規則又ハ被告人ノ利益ノ為メ定メタル規則ニ背キタルニ因リ更ニ之ヲ復行スヘキ時

二 原被ノ證人遅延セシテ出廷シタルニ因リ其陳述ヲ聽クヘキ時

三 證人又ハ鑑定人以前ノ陳述ヲ変更スル時

四 被告人新ナル陳述ヲ為スヘキヲ申立タル時

第四百十六條 裁判長ハ辯論終結ノ言渡ヲ為シタル後公訴事件ヲ約述シ原被ノ重要ナル證憑ヲ指示シ且陪審ニ對シ其職務ニ注意スヘキヲヲ告知スヘシ

前數ノ場合ニ於テ裁判長ハ自己ノ意見ヲ發露スヘカラス

第四百十七條 陪審ハ裁判長公訴事件ヲ約述

シタル後ハ其決議ノ申立ヲ為スニ至ルマテ退散スルヿヲ得ス此規則ニ背キ刑ノ言渡アリタル時ハ其決議ノ効ナカル可シ

陪審

裁判長ハ辯論終結ノ時刻晩キ時ハ公訴事件ヲ約述シ及ヒ問題ヲ付スルヿヲ次日ニ延ハスヲ得

第四百十八條　裁判長ハ公訴事件ノ約述ヲ終リタル後公訴狀ニ記載シタル主タル事件附帶ノ事件加重及ヒ減輕ノ模樣ニ付キ各別ニ問題ヲ作リ之ヲ陪審ニ付ス可シ

被告人數名アル時ハ一名ヿトニ問題ヲ作ル可シ

第四百十九條　被告事件ハ法律ニ定メタル罪ノ性質ヲ以テ之ヲ指示シ其罪名ヲ以テス可カラス

第四百二十條　犯罪アリタルヿ被告人本犯タルヿ及ヒ犯罪ノ責アルヿニ付テハ止タ被告人ノ罪アリヤノ問題ヲ付ス可シ

被告人被告事件ヲ確認スト雖モ法律ニ於テ犯罪ノ責ナキヿヲ申立タル時ハ其事件及ヒ

原由ニ付キ別ニ問題ヲ付ス可シ

第四百二十一條　被告事件ノ故意又ハ謀意ニ出テタルヤノ問題ハ罪アリヤノ問題ニ含蓄シタル者トス

故意又ハ謀意ニ因リ罪ヲ變更スル事件ニ付テハ別ニ問題ヲ付ス可シ

第四百二十二條　被告人十二歳以上十六歳未滿ノ幼者ナル時ハ罪アリヤノ問題ニ被告人是非ノ辨別アリタルヤヲ明示ス可シ

第四百二十三條　被告人又ハ被害者ノ身分ニ因リ罪ヲ變更スル時ハ證憑ノ如何ニ拘ハラス其身分ニ付キ別ニ問題ヲ付ス可シ

第四百二十四條　公訴受理ス可カラサルノ原由ニ付テハ別ニ問題ヲ付スルニ及ハス但事実ニ付キ疑アル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ問題ヲ付ス可シ

第四百二十五條　公訴狀ニ記載シタル條件ニ係ル問題ノ外左ノ場合ニ於テハ辨論中ニ発見シタル條件ニ付キ別ニ問題ヲ付ス可シ

一　犯罪ノ性質如何ヲ問ハス附帯ノ事件又ハ加重減軽ノ模様ヲ発見シタル時

二　公訴状ニ記載シタル犯罪他ノ重ク又ハ軽キ同一ノ性質ナル重罪又ハ軽罪ト為ル可キヿヲ発見シタル時

三　公訴状ニ記載シタル未遂罪ノ既遂罪ト為リ又ハ既遂罪ノ未遂罪ト為ル可キヿヲ発見シタル時

四　公訴状ニ記載シタル正犯ノ従犯ト為リ又ハ従犯ノ正犯ト為ル可キヿヲ発見シタル時

第四百二十六條　辨論中ニ発見シタル條件ニ係ル問題ハ検察官又ハ被告人ノ請求ニ因リ之ヲ付ス可シ

裁判長ハ職権ヲ以テ前項ノ問題ヲ付スルヿヲ得但辨論終結ノ言渡前其旨ヲ検察官及ヒ被告人ニ告知ス可シ

検察官及ヒ被告人ハ公訴又ハ辨護ノ利益ノ為メ一日ノ猶豫ヲ求ムルヿヲ得

又辨論中ニ発見シタル條件ニ付キ猶豫ヲ求

ムルヿヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ為サシメタル本案ノ事件ヲ本會入ハ次會ニ於テ他ノ陪審ニ付スヿ可シ

第四百二十七條　裁判長ノ職權ヲ以テ辯論中ニ發見シタル條件ニ係ル問題ヲ付スルニ付キ辯論終結ノ言渡前其旨ヲ告知セサル時ハ檢察官及ヒ被告人ヨリ一日ノ猶豫又ハ豫審ヲ求ムルヿヲ得

第四百二十八條　第四百二十五條ノ場合ニ於テ同一ノ條件ニ付キ重ク又ハ輕キ二箇ノ問題ヲ付スヿ可キ時ハ其重キヲ先ニシテ輕キヲ後ニスヿ可シ

裁判長ハ其重キ問題ニ付キ否又ハ然否同數ト決シタルニ非サレハ輕キ問題ニ付キ投票ヲ為スヿ可カラサルヿヲ陪審ニ告知スヿ可シ

第四百二十九條　酌量減輕ノ模樣ニ付テハ問題ヲ付スヿ可カラス

裁判長ハ各箇ノ問題ヲ付シタル後陪審ニ其投票ノ多數ニ依リ被告人ニ酌量減輕ノ模樣

アリトスル時ハ左ノ如ク申立ツ可キヿヲ告知ス可シ

投票ノ多數ニ依リ被告人某ニ酌量減輕ノ模様アリトス

若シ其告知ナクシテ陪審ヨリ酌量減輕ノ申立ナキ時ハ刑ノ言渡ノ効ナカル可シ

第四百三十條　裁判長ハ前數條ノ規則ニ從ヒ問題書ヲ作リ其紙尾ニ前二條ノ告知ヲ記載シ之ヲ朗讀ス可シ

裁判長ハ檢察官及ヒ被告人ニ問題ノ條件及ヒ其順序ニ付キ異議アルヤ否ヲ問フ可シ

異議ノ申立アリタル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ之ヲ判決ス可シ

第四百三十一條　問題書ニハ裁判長及ヒ書記署名捺印シ之ヲ陪審長ニ交付ス可シ但訴訟書類ヲ添フ可カラス

陪審ハ即時ニ商議室ニ退ク可シ若シ問題ノ意義ニ付キ疑アル時ハ商議室ニ退ク前裁判長ノ説明ヲ求ムルヿヲ得

第四百三十二條　陪審ノ商議中ハ裁判官檢察

官及ヒ書記各其室ニ退キ被告人ハ留置場ニ退カシムル可シ

第四百三十三條　陪審ハ決議ヲ終ルマテ其室ヨリ出ルヿヲ得ス又何人ト雖モ裁判長ノ允許ヲ得ルニ非サレハ其室ニ入ルヿヲ得ス此規則ニ背キ刑ノ言渡アリタル時ハ陪審決議ノ効ナカル可シ

第四百三十四條　陪審高議中問題ノ意義ニ其疑ヲ生シタル時ハ其室ニ於テ裁判長ノ説明ヲ求ムルヿヲ得

裁判長ハ檢察官及ヒ辨護人立會ノ上其説明ヲ為ス可シ

第四百三十五條　陪審ハ原被ノ證憑及ヒ各箇ノ問題ニ付キ互ニ討論スルヿヲ得

陪審長各箇ノ問題ヲ朗讀シタル後其問題ノ順序ニ從ヒ各陪審秘密ニ投票ヲ為ス可シ但票ニハ單ニ然又ハ否ト記載シ之ヲ函中ニ入ル可シ

第四百三十六條　酌量減輕ニ付テノ投票ハ最終ニ之ヲ為ス可シ但被告人數名アル時ハ各

別ニ投票ヲ為ス可シ

酌量減軽ノ申立ハ陪審六名以上ノ同説ニ非サレハ之ヲ問題書ニ記載ス可カラス

第四百三十七條　然否分明ナラス又ハ不規則ナル投票アリテ決議ノ結果ヲ得サル時ハ更ニ投票ヲ為ス可シ

第四百三十八條　被告人ニ不利ナル申立ハ陪審六名以上ノ同説ニ依ル可シ

然否同数ナル時ハ被告人ニ利益ナルノ申立ト為ス可シ但酌量減軽ノ申立ハ此限ニ在ラス

第四百三十九條　各箇ノ問題ニ付テノ投票ハ陪審立會ノ上ニ依リ陪審長即時ニ之ヲ點檢シ問題書ニ多数ニ依リ然又ハ否若クハ然否同数ト朱書ス可シ

陪審長ハ投票ノ結果ヲ記載シタル後之ヲ朗讀シ年月日及ヒ場所ヲ附記シ署名捺印ス可

シ

票ハ即時ニ之ヲ焼棄スヘシ

第四百四十條　陪審ハ投票ヲ終リタルヿヲ裁判長ニ通知シタル後再ヒ公廷ニ入リ其席ニ就クヘシ

第四百四十一條　裁判長ハ陪審長ヲシテ陪審ノ決議ヲ申立シムヘシ

陪審長ハ起立シテ順次ニ問題及ヒ申立書ヲ朗讀スヘシ

第四百四十二條　裁判長ハ陪審ノ申立書ニ署名捺印シタル後被告人ヲ公廷ニ呼入レ書記ヲシテ問題及ヒ申立書ヲ朗讀セシムヘシ

第四百四十三條　有罪ノ申立アリタル時ハ檢察官法律適用ノ為メ其意見ヲ陳述スヘシ

被告人及ヒ辨護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルヿヲ辨論スルヲ得

檢察官被告人及ヒ辨護人ハ陪審ノ申立ニ反スル辨論ヲ為スヿヲ得ス

第四百四十四條　前條ノ辨論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述

治罪法草案審査局

ス可シ被告人辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯
ヲ為スヿヲ得
檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ
裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルヿヲ
得但閉廳前之ヲ判決ス可シ
第四百四十五條　裁判所ニ於テハ裁判言

渡前陪審ノ申立分明ナラサルヿ又ハ矛盾ス
ルヿヲ認知シタル時ハ檢察官被告人ノ請求
ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其申立ヲ改正スル為
メ更ニ投票ヲ為ス可キヿヲ言渡ス可シ
第四百四十六條　裁判所ニ於テハ有罪ノ申立
アリタル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ為ス可
シ
又有罪ノ申立アリタリト雖モ第二百二十七
條第二以下ノ場合ニ於テハ不問ノ言渡ヲ為
シ且被告人ヲ放免ス可シ

第四百四十七條　有罪ノ申立アリタル時ハ其所爲輕罪ナリト雖モ加重減輕又ハ酌量減輕ノ模樣ニ付キ陪審ノ申立ハ其効アリトス

第四百四十八條　無罪ノ申立アリタル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ為シ且被告人ヲ放免ス可シ

裁判所ニ於テハ原被ノ要償ニ付キ第四百四十三條ノ規則ニ從ヒ裁判言渡ヲ為ス可シ

第四百四十九條　辯論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶セサル他ノ重罪輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ檢察官ノ請求アル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ為サシメ本會又ハ次會ニ於テ本案ノ事件ト共ニ之ヲ裁判ス可シ

第四百五十條　檢察官其他訴訟関係人ハ重罪裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ為スヲ得

第四百五十一條　陪席裁判ハ陪審ヲ用フルヲナク之ヲ為ス可シ

裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀及ヒ必要ナリト

スル豫審書類ヲ朗讀セシメ又原被證人ノ陳述ヲ聽クヲ可シ

檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ民事原告人ハ要償ニ付キ各其意見ヲ陳述スヲ可シ

民事擔當人ハ答辯スルヿヲ得

第四百五十二條　闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ本人又ハ其住所ニ送達スヲ可シ

第四百五十三　闕席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ付テハ檢察官ニ非サレハ上告ヲ為スヿヲ得

スル

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ノ裁判言渡ニ對シ上告ヲ為スヿヲ得

第四百五十四條　闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ申立ヲ為スヿヲ得但捕ニ就キタル時ハ十日内ニ故障ヲ申立ヲ為スヲ可シ

第四百五十五條　故障ノ申立ハ闕席裁判ヲ為シタル重罪裁判所ニ文ヲ為スヲ可シ

重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理スヲ可

キヤ否ヲ判決スヘシ

其故障ヲ受理スヘキ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ為スヘシ

第四百五十六條　闕席裁判ヲ為シタル重罪裁判閉廷ノ後ハ其地ノ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ為スヘシ

控訴裁判所ニ於テハ其故障ヲ受理スヘキ者ト判決シタル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判ヲ受クヘキノ言渡ヲ為スヘシ

治罪法草案審査局

第五編　大審院ノ職務

第一章　上告

第四百五十七條　檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ左ノ場合ニ於テ上告ヲ為スヿヲ得

一　法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時

二　裁判所ノ構成規則ニ背キタル時

三　法律ニ背キ管轄違又ハ管轄ナリトノ言渡若クハ管轄ニ非サル裁判所ニ事

治罪法草案審査局

件ヲ移スノ言渡アリタル時

四　法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無効ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セサル時

五　法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時

六　法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時

七　裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルヿヲ得ヘキ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタル時

八　裁判言渡ヲ公行セス又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ナクシテ訊問及ヒ辯論ヲ公行セサル時

九　事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アル時

十　擬律ノ錯誤アル時

十一越權ノ

第四百五十九條

擔當人ハ私法

ニ對シ前條ニ

ストヲ得

第四百五十九條

決アルマテ

ヲ得

大審院檢事長モ亦附帶ノ上告ヲ為スヿヲ得

第四百六十一條　上告ノ期限ハ三日ナリトス但

豫審ニ付テハ言渡書ヲ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付テハ言渡アリタルヨリ起算ス

第四百六十二條　豫審及ハ公判ノ書言渡ニ對シ上告アリタル時ハ勾留保釋責付釋放及ヒ放免ノ言渡ヲ除クノ外其執行ヲ停止ス

第四百六十三條　上告ヲ為サントスル者ハ其申立書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

上告ヲ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時内ニ書記ヨリ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百六十四條　上告申立人ハ其申立ヲ為シ

十一越權ノ處分アル時

第四百五十八條　民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ニ關スル豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ前條ニ定メタル原由ニ付キ上告ヲ為ストヲ得

第四百五十九條　上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ上告ヲ為スヿヲ得

大審院檢事長モ亦附帶ノ上告ヲ為スヿヲ得

第四百六十條　上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テハ言渡書ヲ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付テハ言渡アリタルヨリ起算ス

第四百六十一條　豫審及ハ公判ノ書言渡ニ對シ上告アリタル時ハ勾留保釋責付釋放及ヒ放免ノ言渡ヲ除クノ外其執行ヲ停止ス

第四百六十二條　上告ヲ為サントスル者ハ其申立書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出スヿヲ可シ

上告ヲ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時内ニ書記ヨリ之ヲ對手人ニ送達スヿヲ可シ

第四百六十三條　上告申立人ハ其申立ヲ為シ

法學堂藏書

分アル時

民事原告人被告人及ヒ民事
關スル豫審又ハ公判ノ言渡
メタル原由ニ付キ上告ヲ為
上告ノ對手人ハ大審院ノ判
ニテモ附帶ノ上告ヲ為スヿ
附帶ノ上告ヲ為スヿヲ得
告ノ期限ハ三日ナリトス但

渡書ヲ送達アリタルヨリ起
テハ言渡アリタルヨリ起算ス
豫審及ハ公判ノ書渡ニ對シ
ハ勾留保釋責付釋放及ヒ放
ノ外其執行ヲ停止ス
上告ヲ為サントスル者ハ其
所ノ書記局ニ差出ス可シ
其申立アリタルヨリ二十四
之ヲ對手人ニ送達ス可シ
上告申立人ハ其申立ヲ為シ

免訴無罪又ハ不問ノ言渡アリタル場合
ニ於テハ規則被告人ノ利益ヲ考定ナタ
ル二背キタルトキ又ハ犯罪ノ情狀ニ因
リ特ニ寛容アリト認メテ上告ヲ為スヿヲ
得ス

タルヨリ五日内ニ趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百六十四條　上告對手人ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ五日内ニ答辯書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ

第四百六十五條　檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ハ二通ヲ作リ一通ヲ大審院ニ差出シ一通ヲ對手人ニ送達ス可シ

私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ニ付テモ亦同シ

第四百六十六條　書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル後速ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其裁判所ノ檢察官ニ差出ス可シ

檢察官ハ其書類ヲ五日内ニ大審院檢事長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ添フ可シ

檢事長ハ上告事件ヲ刑事局ノ簿冊ニ登記ス

可キヿヲ院長ニ請求ス可シ

第四百六十七條　上告申立人及ヒ對手人ハ代言人ヲ差出スヿヲ得

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢察官ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キ者トシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ代言人ヲ選任セサル時ハ院長ノ職權ヲ以テ其院所屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第四百六十八條　院長ハ刑事局判事中ニテ專

法學博士穗積陳重

任判事一名ヲ命ス可シ

專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意見ヲ付ス可カラス

第四百六十九條　上告申立人及ヒ對手人ハ專任判事ノ報告書ヲ差出スマテハ大審院書記局ヲ經由シテ其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書ヲ差出スヿヲ得

專任判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差出シタル時ハ之ヲ其報告書ニ添フ可シ

第四百七十條　書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷

法學博士穗積陳重

ノ日時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ代言人ニ
報知ス可シ

第四百七十二條　開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專
任判事其報告書ヲ朗讀ス可シ
檢事長及ヒ代言人ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ
私訴ノ上告ニ付テハ檢事長最終ニ其意見ヲ
陳述ス可シ

第四百七十三條　上告申立人又ハ對手人ヨリ
代言人ヲ差出サヽル時ハ其儘ニテ判決ヲ爲
ス可シ

第四百七十三條　大審院ニ於テ上告ノ理由ナ
レトスル時ハ之ヲ棄却スルノ言渡ヲ爲ス可
シ

第四百七十四條　管轄違又ハ管轄ナリトノ言
渡ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ其管轄ヲ
定ムルニ付テノ證憑充分ナラサル時ハ第

第四百七十五條　大審院ニ於テ豫審又ハ公判
ノ言渡ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ原由アリ
トスル時ハ其言渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ

他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ為スヲ可シ但後ノ
數條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラズ
第四百七十六條　陪審ヨリ有罪ノ申立ヲ為シ
タル事件ニ付キ擬律ノ錯誤若クハ法律ニ背
キ公訴ヲ受理シ又タ受理セサルヲ以テ原裁
判言渡ヲ破毀シタル時ハ其事件ヲ移スヲ可シ
ノ大審院ニ於テ直ニ裁判言渡ヲ為スヲ可シ
第四百七十七條　豫審又ハ公判ノ手續規則ニ
背キタルヿアリト雖モ其後ノ利害ヿ
及ホサヽル時ハ其事件ノ他ノ裁判所ニ移ス

ヿナク止タ其手續ヲ破毀スヲ可シ
第四百七十八條　豫審又ハ公判ノ言渡ノ幾分
ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ
關係アラサル時ハ大審院ニ於テ其上告ニ係
ル部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直ニ相當ノ裁判
言渡ノ為シ又ハ其事件ニ他ノ裁判所ニ移スヲ可
シ
第四百七十九條　大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ
破毀シ直ニ裁判言渡ヲ為シタル時ハ原裁判
所又ハ他ノ裁判所ヲシテ其執行ヲ為サシム

可シ

第四百八十條　大審院ニ於テ破毀シタル心事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ為ス可キ時ハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ定示ス可シ但單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ同等ノ民事裁判所ニ移ス可シ

第四百八十一條　法律ノ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ者トス

大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ為スヿヲ得

第四百八十二條　法律ニ於テ罰セサハ所為ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ定期内ニ上訴ヲ為サスシテ其裁判言渡確定シタル時ハ大審院檢事長ヨリ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上告ヲ為スヿヲ得

非常上告ヲ為スヿヲ得タル時ハ裁判言渡ヲ破毀シ大審院ニ於テ直ニ裁判言渡ヲ為ス可シ

第四百八十三條　左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判言渡ニ對シ檢事長其他訴訟關係人ヨリ其院ニ哀訴スルヿヲ得

一　大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ復行セサル時

二　訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ為サヽル時

三　同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件齟齬シタル時

法典調査局

第四百八十四條　哀訴ヲ為サントスル者ハ裁判言渡アリタルヨリ三日内ニ書記局ニ其申立ヲ為ス可シ

書記ハ申立書ヲ受取リタルヨリ三日内ニ之ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ同一ノ期限内ニ其答辯書ノ差出ス可シ

大審院ニ於テハ哀訴ヲ受理ス可キヤ否ノ取調ヲ為シ之ヲ受理ス可キ者トスル時ハ通常上告ノ規則ニ從ヒ更ニ判決ヲ為ス可シ

第四百八十五條　大審院ノ裁判言渡ハ其言渡

台帳法草案審査局

アリタルヨリ三日間又裁訴アリタル時ハ
其判決アルマテ執行ヲ停止ス

第二章　再審ノ訴

第四百八十六條　再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ
重罪軽罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ
為メ之ヲ為スヿヲ得但裁判確定ノ後ニ非サ
レハ之ヲ為スヿヲ得ス
一　人ヲ殺シタル罪ニ付刑ノ言渡アリタル
後其言渡ノ日ニ當リ殺サレタリト認
メラレシ者現ニ生存シ又ハ犯罪前既
ニ死去シタルノ確證アル時
二　同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スシテ別

二刑ノ言渡ヲ受ケタル者アル時

三　犯罪アル以前ニ作リタル公正ノ證書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルヿヲ證明シタル時

四　被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アル時

五　公正ノ證書ヲ以テ訴訟書類ニ偽造又ハ錯誤アルヿヲ證明シタル時

第四百八十七條　再審ノ訴ヲ為スヿヲ得ヘキ者左ノ如シ

一　刑ノ言渡ヲ為シタル裁判所ノ檢察官

二　刑ヲ言渡ヲ為シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢事長

三　大審院檢事長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ為ス可シ

四　刑ノ言渡ヲ受ケタル者

五　刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬

第四百八十八條　再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタル ニ拘ハラス何時ニテモ

治罪法草案審査局

第四百八十九條　再審ノ訴ヲ為サントスル者ハ其趣意書ニ原裁判言渡書ノ謄本及ヒ證憑書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ大審院檢事長ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所ノ檢事長自ラ再審ノ訴ヲ為サントスル時ハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ

第四百九十條　大審院ニ於テハ檢察長ノ請求ニ因リ速ニ專任判事一名ヲシテ其取調ヲ為シ報告書ヲ差出サシム可シ

第四百九十一條　大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ閣キ刑事局判事全員會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ判決ヲ為ス可シ

第四百九十二條　大審院ニ於テ再審ノ原由アルヿヲ認メタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ為ス可キヿヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所

ニ移ス可シ

其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ従ヒ裁判ヲ為ス可シ

第四百九十三條　死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ為シタル場合ニ於テ大審院ニテ再審ノ原由アルヿヲ認メタル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スヿナク原裁判言渡ヲ破毀ス可シ

第四百九十四條　再審ノ裁判ニ依リ無罪ノ言渡アリタル時又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル時ハ其者ノ名誉ヲ復スル為メ其言渡書ヲ掲示公告ス可シ

第三章　裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四百九十五條　通常裁判所ト特別裁判所トヲ問ハス管轄ニ非サルノ言渡ヲ為シ其言渡確定シタル時又忌避ノ原由若クハ非常ノ事變ニ因リ訴訟事件ヲ管理スルヿ能ハサル時ハ検察官其他訴訟関係人ヨリ裁判管轄ヲ定スルノ訴ヲ為スヿヲ得

大審院検事長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職権ヲ以テ其訴ヲ為スヿヲ得

第四百九十六條　裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ為サントスル者ハ其趣意書ニ訴訟書類ヲ添ヘ之ヲ大審院ノ書記局ニ差出ス可シ

第四百九十七條　大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ト檢事長ノ意見書ニ依リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定ム可シ

第四章　公安又ハ嫌疑ノ為メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第四百九十八條　犯罪ノ性質被告人ノ身分負數地方ノ民心其他重大ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ恐アル時ハ公安ノ為メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スヿヲ得

第四百九十九條　公安ノ為メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿ノ命ニ因リ大審院檢事長ヨリ其院ニ之ヲ為ス可シ

第五百條　大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申立ヲ聽ク暇ナリ速ニ前條ノ訴ヲ判

決スヽ可シ

第五百一條　被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルヿ能ハサルノ恐アル時ハ嫌疑ノ為メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スヿヲ得

第三百二條　嫌疑ノ為メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ管轄裁判所ノ検察官其他訴訟関係人ヨリ之ヲ為スヿヲ得

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ為シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辨論ヲ為シタル時ハ前項ノ訴ヲ為スヿヲ得ス

第五百三條　嫌疑ノ為メ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ為スニハ其趣意書二通ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出スヽ可シ

書記ハ速ニ其一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリタルヨリ三日内ニ答辨書ヲ差出スヿヲ得

第五百四條　大審院ニ於テハ第四百九十七條ノ規則ニ從ヒ前條ノ訴ヲ判決スヽ可シ

第五百五條　嫌疑ノ為メ裁判管轄ヲ移スノ訴アリタル時ハ裁判所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス

治罪法草案審査局

第六編　裁判執行復權及ヒ恩赦

第一章　裁判執行

第五百六條　重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラス

第五百七條　死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ

第五百八條　司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日内ニ其執行ヲ為ス可シ

第五百九條　死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シ

治罪法草案審査局

タル時ハ直ニ之ヲ執行ス可シ

第五百十條　刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ之ヲ為ス可シ

罰金科料裁判費用及ヒ没收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徵收ス可シ

破壞又ハ廢棄ス可キ没收物品ハ檢察官之ヲ處分ス可シ

第五百十一條　死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作リ刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ為シ

タル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第五百十二條　裁判言渡確定シ又ハ闕席裁判アリタル時ハ其刑ノ言渡ヲ為シタル裁判所ノ書記既決犯罪表ヲ作リ左ノ條件ヲ記載ス可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ為シタル時ハ其執行ヲ為シタル裁判所ノ書記之ヲ作ル可シ

一　犯人ノ氏名年齡職業住所及ヒ出生ノ

地

二　罪名刑名

三　再犯

四　裁判言渡ヲ為シタル年月日

五　對審裁判又ハ闕席裁判

第五百十三條　既決犯罪表ハ二通ヲ作リ一通ヲ司法省ニ送致シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置スヘシ

違警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作リ其裁判所ノ書記局ニ藏置スヘシ

第五百十四條　裁判言渡ノ條件ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立アリタル時ハ刑ノ言渡ヲ為シタル裁判所ニ於テ之ヲ判決スヘシ

第五百十五條　刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタル場合ニ於テ人違タルノ申立アリタル時ハ之ヲ認定スル為メ前ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送致スヘシ

裁判所ニ於テ本犯ナルヿヲ認定スルヿ能ハサル時ハ事實參考ノ為メ曾テ其事件ニ干預

シタル裁判官檢察官書記陪審又ハ原被ノ證人ヲ呼出スヿヲ得

第五百十六條　前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判言渡ヲ為ス可シ但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サス

第五百十七條　賠償及ヒ訴訟関係人ニ償還ス可キ裁判費用ニ付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第二章　復權

第五百十八條　復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ

復權ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所檢事ニ之ヲ差出ス可シ

第五百十九條　復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

一　裁判言渡書ノ謄本

二　主刑ノ滿期特赦又ハ期滿免除ヤリタルヿヲ證明スル書類

三　假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタル
ノ證書
四　賠償及ヒ裁判費用ヲ辨濟シ又ハ其義
務ヲ免レタルノ證書
五　過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル
書類
第五百二十條　檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ
取調ヲ爲シ前条ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ
控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ
第五百二十一條　檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ

司法省蔵書審査局

爲シ復權ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ
之ヲ司法卿ニ差出ス可シ
第五百二十二條　司法卿ハ復權ノ願ニ關スル
書類ヲ檢閲シ其願ヲ允許ス可キ者ト認メタ
ル時ハ速ニ上奏ス可シ
第五百二十三條　勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ因
リ復權ノ願ヲ棄却シタル時ハ司法卿ヨリ其
旨ヲ控訴裁判所檢事長ニ通知シ檢事長ヨリ
願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ通知ス
可シ

台湾法令研究会

第五百二十四條　前條ノ場合ニ於テハ刑法第
六十三条ニ定メタル期限ノ半ヲ経過スルニ
非サレハ更ニ其願ヲ為スヿヲ得ス
更ニ復權ノ願ヲ為スニ付テモ亦前數條ノ規
則ニ從フ
第五百二十五條　復權ノ裁可アリタル時ハ司
法卿ヨリ其裁可狀ヲ控訴裁判所檢事長ニ送
致シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判
所檢事ニ送致ス可シ
檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ

又刑ノ言渡ヲ為シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄
本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡
書ニ記入ス可シ

第三章　特赦

第五百二十六條　特赦ハ刑ノ言渡確定シタル
後何時ニテモ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ
情狀ヲ具シ司法卿ニ申立ルヿヲ得
監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ為ス時ハ檢察官ヲ
經由ス可シ但檢察官ハ意見書ヲ添フ可シ
特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類

ニ意見書ヲ添ヘ上奏ス可シ

第五百二十七條　司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立ヲ為スヿヲ得

第五百二十八條　死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セス

第五百二十九條　特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ為シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第五百三十條　特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ為シタル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第五百二十五條ノ規則ニ從フ

法學士室常設文庫